地質学雑誌　第123巻　第1号（通巻1456号）付録　平成29年1月15日発行（毎月1回15日発行）

日本地質学会 *News*

Vol.20 No.1 January 2017

会長年頭挨拶：
　日本地質学会創立125周年を迎えるにあたって
日本地質学会創立125周年関連：
　記念事業の概要と寄付のお願い/記念ロゴについて

出 版 物 在 庫 案 内

ご希望の方は代金を添えて本会事務局宛お申込みください．なお，２冊以上のお申込みにつきましては送料をお問い合わせください．

現金書留または郵便振替　00140－8－28067

40号以前の論集については，一部在庫がございます．院生・学生４割引，正会員２割引で販売しております．ご希望の方は学会事務局までお問い合わせ下さい．No. 40以降の論集：院生・学生のみ２割引

地 質 学 論 集

第 40 号　中央構造線のネオテクトニクス—その意義と問題点—．岡田篤正ほか編，250pp., 1992年12月刊，会員頒価3,200円，〒350円

第 41 号　中部九州後期新生代の地溝．長谷義隆ほか編，192pp., 1993年６月刊，会員頒価3,100円，〒300円

第 42 号　西南日本の地殻形成と改変．小松正幸ほか編，357pp., 1993年４月刊，会員頒価3,100円，〒350円

第 43 号　浅部マグマ溜りとその周辺現象の地球科学．村岡洋文ほか編，177pp., 1994年４月刊，会員頒価2,000円，〒350円

第 44 号　島弧火山岩の時空変遷．周藤賢治ほか編，335pp., 1995年11月刊，会員頒価2,800円，〒350円

第 45 号　~~シーケンス層序学—新しい地層観を目指して．斎藤文紀ほか編，~~**（売り切れました）**

第 46 号　火山活動のモデル化．佐藤博明ほか編，162pp., 1996年９月刊，会員頒価 1,900円，〒300円

第 47 号　日高地殻—マントル系のマグマ活動．荒井章司ほか編，323pp., 1997年４月刊，会員頒価3,000円，〒350円

第 48 号　Cretaceous Environmental Change in East and South Asia（IGCP350）Contributions from Japan—　岡田博有ほか編，188pp.，1997年６月刊，会員頒価 2,100円，〒350円

第 49 号　21世紀を担う地質学．新妻信明ほか編，232pp.，1998年３月刊，会員頒価 2,500円，〒350円

第 50 号　構造地質　特別号—21世紀の構造地質学にむけて—．狩野謙一ほか編，263pp.，1998年７月刊，会員頒価2,500円，〒350円

第 51 号　地震と地盤災害—1995年兵庫県南部地震の教訓—．岡田博有ほか編，162pp.，1998年３月刊，会員頒価3,000円，〒350円

第 52 号　オフィオライトと付加体テクトニクス．宮下純夫ほか編，316pp.，カラー 10pp.，1999年９月刊，会員頒価3,000円，〒350円

第 53 号　本州弧下部地殻と珪長質マグマの生成・活動システム．加々美寛雄ほか編，401pp.，1999年11月刊，会員頒価3,900円，〒360円

第 54 号　タフォノミーと堆積過程—化石層からの情報解読—小笠原憲四郎ほか編，197pp.，1999年12月刊，会員頒価2,900円，〒350円

第 55 号　~~ジュラ紀付加体の起源と形成過程．木村克己ほか編，~~**（売り切れました）**

第 56 号　古領家帯と黒瀬川帯の構成要素と改変過程．高木秀雄ほか編，253pp., 2000年３月刊，会員頒価2,900円，〒350円

第 57 号　砕屑岩組成と堆積・造構環境．公文富士夫ほか編，240pp., 2000年９月刊，会員頒価2,800円，〒350円

第 58 号　地震イベント堆積物—深海底から陸上までのコネクション—藤原　治ほか編，169pp., 2004年12月刊，会員頒価2,900円，〒350円

第 59 号　沖積層研究の新展開　井内美郎ほか編，212pp.，2006年５月刊，会員頒価2,400円，〒350円

リーフレットシリーズ

大地の動きを知ろう—地震・活断層・地震災害—　1995年４月発行　会員頒価200円（非会員300円）

大地のいたみを感じよう—地質汚染Geo－Pollutions 1997年２月発行　会員頒価200円（非会員300円）

大地をめぐる水—水環境と地質環境—　2001年５月発行　会員頒価300円（非会員400円）

日本列島と地質環境の長期安定性　2011年発行　会員頒価500円（非会員600円）

地質リーフレットたんけんシリーズ（同一リーフレットを20部以上購入の場合割引あり）

１．箱根火山たんけんマップ—今、生きている火山　2007年５月発行　会員頒価300円

２．屋久島地質たんけんマップ—洋上アルプスは不思議な地質がいっぱい—　2009年３月発行　会員頒価300円

３．城ヶ島たんけんマップ—深海から生まれた城ヶ島—　2010年９月発行　会員頒価300円

４．富士山青木ヶ原溶岩のたんけん—樹海にかくされた溶岩の不思議—　2014年３月発行　会員頒価300円

５．長瀞たんけんマップ—荒川が刻んだ地球の窓をのぞいてみよう—　2016年２月発行　会員頒価300円

地質リーフレットシリーズ

１．箱根火山　2007年７月発行　会員価格1,000円**（同一リーフレットを20部以上購入の場合割引あり）**

下敷き：「干渉色図表」・「偏光顕微鏡による鉱物鑑定表」（英語版）１枚200円（非会員300円）

電子書籍シリーズ

地学を楽しく！：ジオパーク・ジオツアー・地学オリンピック　　2013年12月発行　［Kindle版/PDF版］　定価1,380円

講演要旨集ほか

第118年見学旅行案内書（2011年水戸）　　会員頒価2,800円，〒500円

第117年学術大会講演要旨（2010年富山）　会員頒価4,000円，〒500円

第117年見学旅行案内書（2010年富山）　　会員頒価2,800円，〒500円

第116年見学旅行案内書（2009年岡山）　　会員頒価2,800円，〒500円

第115年見学旅行案内書（2008年秋田）　　会員頒価2,500円，〒500円

※このほか，大会講演要旨は，2002年新潟，2003年静岡，2004年千葉，2006年高知，2007年札幌，見学旅行案内書は，2004年千葉，2005年京都に残部があります．

フィールドノート：学会オリジナル．12×19cm．ハードカバー．レインガード使用　会員頒価１冊500円．

日本地質学会*News*

Vol.20 No.1 January 2017

The Geological Society of Japan *News*
一般社団法人日本地質学会
〒101－0032　東京都千代田区岩本町２－８－15　井桁ビル ６F
編集委員長　小宮　剛
TEL　03－5823－1150　FAX　03－5823－1156
main@geosociety.jp（庶務一般）
journal@geosociety.jp（編集）
http://www.geosociety.jp

Contents

年頭挨拶　日本地質学会創立125周年を迎えるにあたって（会長　渡部芳夫）……2

日本地質学会創立125周年記念事業の概要とそれを成功させるための寄付のお願い ……4

日本地質学会創立125周年記念ロゴについて ……5

2017愛媛大会ニュース ……6
日本地質学会第124年学術大会愛媛大学城北キャンパス（愛媛・松山市）にて，2017年９月16日（土）～18日（月）に開催/トピックセッション募集/愛媛大会に向けてのスケジュール（概略）

案内 ……8
第54回アイソトープ・放射線研究発表会発表論文の募集/第10回 白亜紀国際シンポジウムのお知らせ/ IGCP608「白亜紀アジア－西太平洋生態系」の第５回国際研究集会　1st Circular配付のお知らせ

各賞・助成 ……8
富山県奨学金返還助成制度助成対象者募集

公募結果 ……9

紹介 ……9
地質職人たちのアーカイブス　六連星の会編（足立勝治）/深海底の地球科学　藤岡換太郎（小川勇二郎）

学協会・研究会報告 ……12
IAGR 2016年総会と第13回ゴンドワナからアジア国際シンポジウム参加報告（吉田　勝・角替敏昭）

表紙紹介 ……13

2016年度秋季地質調査研修の実施報告（徳橋秀一・細井　淳）……14

TOPIC ……16
～ 2018年日本地質学会創立125周年を記念して～トリビア学史４　不思議に満ちた白野夏雲（矢島道子）

地層名検索データベースの紹介（巌谷敏光）……17

Island Arc日本語要旨：Vol. 26 Issue 1（January）……19

支部コーナー ……20
西日本支部：平成28年度総会・第168回例会の案内/北海道支部：出版記念シンポジウム「北海道自然探検　ジオ（大地）の魅力がいっぱい！」報告

院生コーナー ……21
2016 Iran-Japan Joint International Workshop on Isotope Geologyに参加して（若杉勇輝）

学会記事 ……23
日本地質学会2016年度第２回理事会議事録/2016年度第３回執行理事会議事録/2016年度第４回執行理事会議事録/2016年度第５回執行理事会議事録

CALENDAR ……28

災害に関連した会費の特別措置のお知らせ

日本地質学会では，災害救助法適用地域で被災された会員の方々のご窮状をふまえ，以下の措置を取らせていただきます．

「日本地質学会に届出の住居または勤務地が災害救助法適用地域に該当する会員のうち，希望する方」は2017年度（平成29年度）会費を免除することといたします．

2016年度において，災害により被害にあわれた方のうち，この措置の適用を希望される会員は，①会員氏名②被害地域③被災状況（簡単に）を明記し，学会事務局までお申し出下さい．お申し出の方法は，郵送，FAX，e-mailのいずれでも結構です．締切は，2017年２月24日（金）までとさせていただきます．

※通常の会費払い込みについては，News12月号「2017年会費払い込みについて」をご参照下さい．

2017年１月５日
日本地質学会　会計委員会

事務局営業カレンダー

お休み

1月 January

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

2月 February

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28				

印刷・製本：日本印刷株式会社　東京都豊島区東池袋4－41－24

日本地質学会創立125周年を迎えるにあたって

一般社団法人日本地質学会　会長　渡部芳夫

日本地質学会は，1893年に東京地質学会として創設されて以来，2018年５月に創立125周年を迎えます．

明治維新の後，日本における地質学は，資源探査と国土の開発のために必須の学問として，その歴史が始まりました．農業，工・鉱業は日本列島の地質の解明とともに発展し，鉄道や道路の敷設，トンネル掘削地の決定などの大規模建設事業には地質学の裏付けが不可欠でした．地質学会の最初の100年の歴史において，地質学は地層や岩石・化石・鉱物などを対象とする学問として発展することによって，大いに日本の近代化に寄与し，社会の発展に貢献してきました．

創立100周年の1993年以降には，地球科学フロンティアである海洋底へのチャレンジにより，レア・メタルやメタンハイドレート，海底熱水鉱床など，未来に繋がる新しい資源・エネルギーの発見が相次いでいます．

また，地球の生成から現在に至るまでの地球史の統合的理解が進むのと同時に，巨大津波についての中長期的予測など，地質変動の未来予測が重要な研究課題となるに至り，頻発する巨大自然災害，複雑化する地球環境問題への対応に，地質学の貢献が強く期待されてまいりました．2011年３月11日の東北地方太平洋沖地震とそれに続く原子力発電所事故は，社会の持続的発展と国土の強靱化に向けて，地質学が担うべき地質環境の評価と適切な情報提供の重要性を，明確に再確認させるものでした．

日本地質学会は，創立125周年を契機として，先端的研究の推進と成果の共有をさらに進め，ジオパークや地学オリンピックを発展させるとともに，全国民的地学教育の充実を目指します．それらの成果が相まって，自然災害や地圏の安全な利活用に対する市民の理解を高める事となり，それにより産業の持続的発展や新たなイノベーションを支えることができると信じるからです．

具体的な創立125周年記念事業としては，広く内外から関連学協会を招待する記念大会，記念シンポジウム，最近25年間の地質学的発展のレビュー，そして地質学から社会へのメッセージ，その他の記念出版物の発行など，一連の記念事業を計画しています．まず具体的には，本年から地質学雑誌での125周年記念レビュー企画がスタートします．日本地質学会の専門部会を中心に，この25年の進歩を踏まえた現在の到達点や課題を集約するものです．詳細な紹介は地質学雑誌に掲載されます．

なお，これらを含む創立125周年事業の企画の全てに，新たに作成した記念ロゴを付して内外にアピールいたします．

これらの記念事業を通じ，日本地質学会会員全ての力をお借りして，地質学は将来に向かって，さらに社会に貢献し続ける事を明確に伝えたいと考えます．会員の皆様もそれぞれのお立場で，共にこの２年間，特別な意識をもって活動してくださることを期待いたします．

この125周年記念事業を契機に，一般社団法人日本地質学会としての将来について見据え直し，次の周年記念を充実して迎えるための方策を検討して参りました．基本的なアクションプランのいくつかは，既に来年度の学会事業として開始する予定でおります．まず，この25年で記憶に残っている重要な経緯として，以下のものが挙げられます．

・1992年：日本地質学会正式欧文誌Island Arcの発刊
・2006年：日本地質学会第I期中期ビジョン策定
・2008年：地質の日「５月１０日」制定
・2008年：日本地質学会の社団法人化
・2008年：日本ジオパーク委員会設立
・2009年：日本ジオパークネットワーク設立と学会支援委員会設立
・2009年：地球惑星科学連合設立と連合への団体加盟
・2010年：任意団体日本地質学会の解散
・2012年：日本地質学会広報誌「ジオルジュ」創刊
・2015年：日本地質学会第II期中期ビジョン策定
・2016年：国際地学オリンピック日本開催

これらは2006年の第Ｉ期中期ビジョン策定に始まり，学会や地質学を取り巻く社会情勢に対応した10年程度の将来に向けての検討と決断・実行であったと言えます．これらの日本地質学会が折々に示した判断には，間違いは無かったものと考えております．

そのうえで，今回創立125周年事業を契機とするアクションプランの大目的とそれを実現するために学会が確保すべき手段を，

「国民全てに地質学に関する有益かつ正確な情報をタイミング良く発信していくこと」

ならびに

「上記を実現する能力・手段・影響力・人的組織的関連を持つ事」

としました．抽象的な表現ではありますが，日本地質学会が，社会にとって有益な学術団体として存在する価値があり続ける事を，具体的な学会運営の上で確保するという事です．

この目標に向かって，学会としてはその結果も形にするために，アクションプランは2017～18年の２年間に短期的，集中的に実施可能なものを選択しております．添付資料に詳細を示しましたが，現在の日本地質学会が認識している課題を抽出し，それらの解決すべき課題について，特に意識すべき受け手を踏まえた解決手段を提案しております．

今回のアクションプランでは，受け手を重視した表現になっておりますが，本学会にはもとより，地質学・地球科学の進展に主体となって寄与する任務が最上位にあります．成果の公表手段が多様化してきている現在，日本地質学会としては，地質学の最新の成果や人材の集約するコミュニティーとして，地方支部・専門部会そして学術大会等を有機的に，且つ意識的に運営することで，新たな課題解決の醸成の場としてあり続ける努力をすることが重要であると考えます．これらの研究者・技術者集団としてのスケール効果を十分に発揮できるような運営財政上の手当も重要な

課題として挙げております．

今年から始まった２年間を，日本の地質学・地球科学にとって記憶に残る日本地質学会となるように，会員の皆様と共に活動して参りたいと思います．125周年記念事業の成功に向けて，会員各位の絶大なるご理解とご協力をお願いしつつ，日本地質学会のさらなる発展的将来を祈念して，年頭のご挨拶といたします．

別添資料　創立125周年に向けて重点化する短期的アクションプラン

社会の各階層や職種・環境の異なる人々に地質学に関する有益かつ正確な情報をタイミング良く発信していくことを目的に，現状での学会を取り巻く課題について，およそ平成29年度から２年間程度の期間に重点的に実施するアクションプランを提案したもの．

課題は第Ⅱ期中期ビジョンから原則として抽出した．

課題	解決したい現状	短期的解決手段	意識する受け手
地質学研究成果の促進	内外の学術団体と地質学会のミッションやスコープの整理が不十分で，研究活動や成果の発信の場として利用されきっていないのではないか	役割分担を再度検討し，支部・専門部会・学術大会等の地質学会の場が生産的に機能するべく支援策を取る事で，学会員や社会に再認識いただく	地質学会員，地質学・地球科学研究者全般
国際化	国境で区切られてはいるが，地質学的には連続している地質現象の解明へ，具体的な国際共同活動と成果発信がしたい	現在の２国間の国際協力関係を確保しつつ，地域的に連続する複数国の共同研究等の具体的成果を目指す	国際委員会：既存の協力国に加えて，地理的に連続する東・東南アジア諸国との連携先，2024年のIGCへの協力窓口
学校教育	国民の常識として備えるべき生活の知恵になっていないのではないか	ここ数年行ってきた教科書・大学入試センター試験の点検を継続して行うとともに，「小さなEarth Scientistのつどい」に加えた地学教員の採用増加に向けた発信も行う．教育用Web教材の作成等について検討する	各教育行政機関，教科書出版社等
大学教育	研究者育成環境とリソースの限界，研究予算削減に学会として支援できないか	学会として貢献可能なニーズを見定め，例えばフィールド調査や特定の技術講習会など順次実施可能なものから協働を目指す	就業先で必要とされる技術等を外部に求める大学教育の場
若手研究者	より効率的で先端的研究成果を得る場になっているだろうか	開かれた成果交換の機会として学会事業は提供し続ける上で，若手がより選択しやすい仕組みや手続きを検討する	連合や国際学会，雑誌を優先する若手研究者会員
企業活動	産業への支援学術として地質学が最重視されておらず，具体的なイノベーションを作り出す体勢が学会に無いままで良いか	継続教育（CPD）を念頭においた講習会・研修会，リクルート活動における企業・学生間の場等を提供すると共に，フィールド教育研修・制度の事業化を目指す	企業所属の地質学会員，学生会員
報道・アウトリーチ	学術団体としての中立性と公平性に鑑みて，尊重されるべき立場をさらに得られるのではないか	出版物や学術大会等からのプレスや投げ込みを随時行うことで担当記者を確保し，問い合わせリストのトップに位置づけてもらいつつ，記事の誤認や不十分さを検知して参考資料等の支援サービスを随時行う	主としてマスコミ，地質現象につながりの深い自治体等
国の施策	防災・環境・資源や研究費配分などで分野としてのステータスが低く，学会コミュニケやパブコメでの効果が検証できていないのではないか	国等の各種委員会へ日本地質学会員としての位置付けを浸透して貰う一方で，各府庁の施策計画やパブコメ募集を把握し，依頼等が無くても学会名で意見を送る体勢をとる	政府，各府庁，学術会議，特定の審議会等
国民の受容性	地質に抱くイメージが専門的で身近でないためか，災害が起こってから認知され忘れられているようだ	アウトリーチ活動に（人的）費用対効果の概念を入れて計画案を策定すると同時に，支部・専門部会での市民向け企画に学会本部が支援して複数の階層や地域で常に身近になるようにしてもらう	参加型ないし報道等を通じての一般市民層
学会・会員	合理的な会費予算の執行を会員に熟知していただき，会員事業の位置付けが不明瞭にならないように努力しないと，会員の学会帰属並びに参画意識が高まらないのではないか	企業会員向けにはCPD事業の実施と事業収入の確保を目指しつつ，街中散歩や建築石材巡検などの市民向けアウトリーチ（地質の日活用）を実施する．これら，会員構成に応じた事業の計画に支部も参画いただけるよう呼びかける	主として地質学会員

日本地質学会創立125周年記念事業の概要と
それを成功させるための寄付のお願い

一般社団法人日本地質学会　会　長　渡部芳夫
125周年記念事業実行委員会　委員長　矢島道子
125周年記念募金委員会　委員長　佃　栄吉

日本地質学会は，1893年に東京地質学会として創設されて以来，来年の2018年５月に創立125周年を迎えます．

当学会は，創立125周年を契機として，先端的研究の推進と成果の共有をさらに進め，ジオパークや地学オリンピックを発展させるとともに，全国民的地学教育の充実を目指します．

そして，それらの成果が相まって，自然災害や地圏の安全な利活用に対する市民の理解を高める事となり，それにより産業の持続的発展や新たなイノベーションを支えることができると信じているからです．

なお，125周年を迎えるにあたって，当学会がどのように活動してきて，今後取り組む必要があるアクションプランについては，本誌に別途掲載していますので，それをご覧ください（本誌２ページ参照）．

創立125周年記念事業としては，以下のような行事を主に計画しています．

① **2018年５月東京で記念式典**を開催します．
② **2018年９月北海道大学で記念学術大会，記念シンポジウム**を開催します．
③ 100周年以降の25年間における地質学および関連科学の発展について，**地質学雑誌特集号**としてレビューします．これは2017年と2018年に連載する予定です．
④ 地質学が社会にいかに貢献しているかを国民にアピールする**啓発図書**を刊行します（2017年８月頃刊行予定）．
⑤ 125周年を契機として既に公表している各都道府県の岩石，鉱物，化石を**「県の石図鑑－全国都道府県の岩石・鉱物・化石－」**として出版します（2018年４月出版予定）．
⑥ 広報誌**「ジオルジュ」の125周年記念英文特別号**を発刊します（2018年予定）．
⑦ 125周年を記念して，これまで作成していなかった**会員証**を発行します（2017年末予定）．
⑧ 125周年を盛り上げるため，プレ年である2017年から**記念ロゴと記念ポスター**を活用します．
記念ロゴの選定については，本誌の別ページに紹介されていますので，ご覧ください．記念ロゴは，学会誌発送の封筒やＨＰに既に掲載しています．
記念ポスター（本誌の裏表紙に掲載）は，2017年1月末に支部，賛助会員や関連諸団体に配布します．あわせて，印刷したポスターに加え，学会HPに掲載する記念ポスターをダウンロードして，創立125周年を盛り上げていただきたいですね．
記念ポスターには，支部や専門部会の行事案内を記載できるスペースを確保している図案がありますので，それを元図としてダウンロードし必要事項を記載すれば，行事案内ポスターとしても使えるようになっています．
記念ロゴと記念ポスターを使って，125周年のプレ年である2017年から大いに盛り上げましょう．

このような記念事業を実行するため，学会では一般会計から引当をするなど資金を工面してきました．しかしながら，それだけでは不足するため，学会員や賛助会員，さらには関連諸団体に寄付をお願いすることにしました．

なお，当学会は一般社団法人ですので，当学会への寄付は，所得税法および法人税の寄付金控除の対象とはなりません．

１．個人会員にお願いする寄付

① 一口5000円で，一口以上をお願いします．
② 寄付してくださった会員については，氏名と口数をニュース誌，HPに掲載します．
③ 二口以上寄付してくださった会員には，地質学が社会にいかに貢献しているかを国民にアピールする記念図書（2017年８月頃刊行予定）を１冊差し上げます．
④ 寄付は，2017年２月から2018年末まで受け付けますが，できるだけ2017年中のご寄付をお願いします．
⑤ 寄付の申し込みについては，学会事務局にご連絡ください．現金，銀行振り込み，郵便振替で受け付けます．なお，クレジットカードの利用については，準備でき次第，ニュース誌でご案内します．

２．賛助会員や関連諸団体にお願いする寄付

① 一口５万円で，一口以上をお願いします．
② 寄付してくださった賛助会員や関連諸団体については，団体名と口数をニュース誌，HPに掲載します．あわせて，地質学が社会にいかに貢献しているかを国民にアピールする記念図書（2017年８月頃刊行予定）を１冊差し上げます．
③ 寄付は，2017年２月から2018年末まで受け付けますが，できるだけ2017年中のご寄付をお願いします．
④ 別途寄付依頼の文書を賛助会員や関連諸団体にお送りし，必要に応じて募金委員会メンバーがお伺いし，寄付のお願いをします．

以上ご説明しました125周年の記念事業を通じ，日本地質学会会員全ての力をお借りして，地質学は将来に向かって，さらに社会に貢献し続ける事を明確に伝えたいと考えます．

会員の皆様もそれぞれのお立場で，共にこの２年間，特別な意識をもって活動してくださることを期待いたします．

日本地質学会創立125周年記念ロゴについて

一般社団法人日本地質学会会長　渡部芳夫
125周年記念事業実行委員会委員長　矢島道子
125周年記念ロゴ選考委員会委員長　佐々木和彦

日本地質学会は，1893年に東京地質学会として創設されて以来，来年の2018年５月に創立125周年を迎えます．

本号に別途掲載してある「日本地質学会創立125周年を迎えるにあたって」に詳しく記載してあるように，当学会は，創立125周年を契機として，先端的研究の推進と成果の共有をさらに進め，ジオパークや地学オリンピックを発展させるとともに，全国民的地学教育の充実を目指します．

そして，それらの成果が相まって，自然災害や地圏の安全な利活用に対する市民の理解を高める事となり，それにより産業の持続的発展や新たなイノベーションを支えることができると信じています．

当学会では，125周年事業を盛り上げるために，記念ロゴを作成することにしました．このたび，応募作品をもとにデザイナーのリメイクを経て，記念ロゴが完成しましたので，皆様にご紹介します．

１．会員からデザインの募集

ニュース誌4月号に，記念ロゴのデザイン募集案内の記事が掲載されました．2016年５月から2.5か月の募集期間を経て，７月中旬までに11名の会員から計17案のデザインが応募されました．

２．会員によるWEB投票

７月末から８月末までの１か月間に，17案のデザインを学会HPに掲載して，会員によるWEB投票を行いました．

59名の会員が投票してくださり，１位５点，２位３点，３位１点というように得点化して評価しました．その結果，１位作品は126点，２位作品は71点，３位作品は67点と，１位作品が他の圧倒する高得点でした．

３．記念ロゴ選考委員会による選考

９月上旬から中旬にかけて，７名の委員からなる選考委員会が，最優秀賞と優秀賞作品の選考にあたりました．結果は，１位作品は会員投票１位の作品で35点，２位作品は会員投票２位の作品で21点，３位作品は会員投票４位で９点，そして４位作品は会員投票３位で５点となりました．

１位と２位が抜きんでており，会員によるWEB投票結果を裏付けた結果でした．その結果，１位作品を最優秀賞として記念ロゴの元となるデザインに，２位作品を優秀賞とすることにしました．

最優秀賞受賞は千徳明日香会員（The University of Queensland），優秀賞受賞は西田　梢会員（東京大学総合研究博物館）です．お二人にはそれぞれ副賞をお送りしました．受賞おめでとうございます．

また，受賞されたお二人以外に作品を応募してくださった方々，WEB投票していただいた会員の皆さんのご協力に深く感謝いたします．

最優秀賞 千徳さん喜びの声：この度は「日本地質学会125周年記念ロゴ」最優秀賞を頂き，誠にありがとうございます．本作は調査用具のルーペを題材に描きました．ルーペのレンズ部分は，『地質学会の歴史』を地層として表現し，ケース部分の倍率が示されるところには創立125周年記念の『×125』を描いています．また，ルーペを題材にすることにより，地質学の過去，現在，未来をつぶさに見つめ直すという意味合いを含みました．今後も地質学会の一員として，知見を地道に積み上げ，少しでも地質学研究の発展に貢献できるよう努力していきたいと思います．

４．記念ロゴの完成

最優秀賞の作品をもとにデザイナーがリメイクした図案を，125周年記念実行委員会で約1.5か月かけて何度も修正意見がかわされました．そして，11月19日の執行理事会，12月3日の理事会の確認を経て，記念ロゴが完成しました．

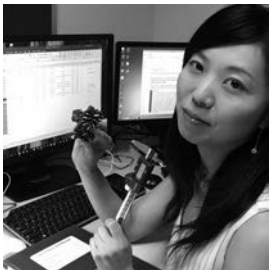
記念ロゴには，カラー版と白黒版の2種類があります．

５．記念ロゴの活用

125周年を盛り上げるため，プレ年である2017年から記念ロゴを学会誌発送の封筒やHPなどいろいろな媒体，機会に活用します．会員の皆様も記念ロゴを大いに使っていただき，創立125周年を学会内外に広めてください．

私たち日本地質学会員は，125周年の記念事業を通じて会員全ての力を結集させ，「地質学は将来に向かって，さらに社会に貢献し続ける」ことを明確に伝えたいと考えます．

会員の皆様もそれぞれのお立場で，共にこの２年間，特別な意識をもって活動してくださることを期待いたします．



１位（最優秀賞）作品と受賞者の千徳明日香会員

２位（優秀賞）作品と受賞者の西田　梢会員

日本地質学会第124年学術大会
愛媛大学城北キャンパス（愛媛・松山市）にて，
2017年９月16日（土）～18日（月）に開催

～ようおいでたなもし，四国地質お遍路の旅へ～

日本地質学会は，愛媛県松山市の愛媛大学城北キャンパスにて，第124年学術大会（2017年愛媛大会）を「**ようおいでたなもし，四国地質お遍路の旅へ**」というテーマで９月16日（土）～18日（月），巡検を19日（火）～20日（木）に開催します．

前回，愛媛大学において開催された本学会の大会は第98年学術大会（1991年）で，今から25年前にもなります．その後，開催地が支部単位のローテーションとなってから，四国地区では，第113年学術大会（高知大会，高知大学，2006年）に続いて２回目の開催となります．

この間，国内では，多数の自然災害が発生しています．例えば，地震災害では，多くの国民の記憶に最も焼き付いているのが，2011年３月11日に発生した東北地方太平洋沖地震による東日本大震災でしょう．この震災では，地震動と津波によって東京電力の福島第一原子力発電所で発生した炉心溶融（メルトダウン）とそれに引き続き発生した水素爆発による原子力建屋破損などによる一連の放射性物質の放出をともなった原子力事故が起こりました．これによる放射能汚染された地域の除染および汚染排水の処理は，５年以上経過した今も継続しています．また，西南日本でも，1995年１月７日の兵庫県南部地震とそれによる阪神・淡路大震災，2005年３月24日の芸予地震，そして2016年の４月14日の熊本地震など，大きな被害を伴う地震が頻繁に発生しています．

福島の原子力発電所の事故をきっかけとして，社会の中における科学技術のあり方が注目されています．科学技術は，私たちの生活を豊かにしてくれる一方，今回のような非常に困難な事態を引き起こします．この問題を早くから提言を出していたのが，アメリカの核物理学者・ワインバーグ博士です．同博士は，1972年に，科学技術のもたらす問題には，科学だけで解決できないものが増大しており，それらの解決には，科学者と市民との対話が必要であると述べ，「科学に問うことはできるが，科学だけでは答えることができない問題群」をトランス・サイエンス問題と呼んでいます．

この観点から考えると，これら地震災害の発生によって，地域社会から地質学者の意見に対する注目度は増大していますが，その発言の責任も問われると考えなければなりません．すなわち，どこまで科学的に検証されているのかという点です．「私はこう考える」という意味の解釈が独り歩きして，社会に間違ったシグナルを出してはいけないということでもあり，その社会的影響を考えなければなりません．地質分野の科学者・技術者は，国民に対してわかりやすい言葉で，かつ科学的にデータを十分に揃え，正確な見解を発信していく必要があります．今後も地震などの自然災害が多数予想されていますが，地質学者は，地域社会とどのように対話し，被害を低減することに貢献できるのかという課題に正面から取り組む必要があります．

さて，明るい話題では，四国では，2011年に室戸ジオパークが世界ジオパークになり，2013年に四国西予ジオパークが日本ジオパークに認定されました．これらの地域では，長年にわたり，多くの地質学会関係者が地域と協働して実践共同体を立ち上げ，ジオパーク認定に向けて活動してきました．これらの地域以外でもいくつかの地域でジオパークを目指す活動が始まっており，今後も益々活発になると思われます．

皆さん，ご存知のように，四国の地質は，西南日本外帯の付加体の帯状配列が認められる地域であり，四国のほとんどを山地が占めるため，海岸沿いを中心に地質学的に重要な基盤岩類の産状を示す露頭が多数観察されます．本大会後半には，巡検が多数用意されていますので，是非，ご参加ください．

今回，実行委員会で提案したテーマは「ようおいでたなもし，四国地質お遍路の旅へ」です．「ようおいでたなもし」とは、伊予弁で「いらっしゃいませ」という意味で、この「お遍路」とは，四国八十八箇所霊場を順番に回ることで知られる「四国遍路」をする人々のことです．これらの寺院は，空海（弘法大師：774年～835年）が修行を行った地として伝えられる寺々で，その道のりは約1,400 kmに及びます．2015年には，四国遍路が文化庁によって日本遺産として認定されており，現在，世界遺産の認定を目指しています．四国遍路は，長い歴史を超えて地域と共存し継承されてきた，四国が世界に誇る生きた文化遺産なのです．

今回のテーマには，四国支部からの２つのメッセージが含まれています．一つは，四国遍路遺産を構成する無形の文化・習俗・思想・伝統という歴史文化的要因が四国という島の固有の地形・地質・景観などが土台になっているということです．すなわち，ジオ（地質も含む大地）が四国遍路という文化的遺産を1000年以上にも渡って育んできたのです．そして，二つ目は「お接待」の精神です．四国では，お遍路さんに対して，地域の人々がお茶や果物等でもてなし，応援する「お接待」と呼ばれる風習が今も受け継がれています．四国支部では，本学術大会期間中，このお接待の精神を余すところなく発揮し，皆さんをおもてなししますという決意表明なのです．

現在の日本は少子高齢化の影響で，本格的な人口減少期を迎え，愛媛県のすべての自治体で人口減少が顕著になってきています．同時に自治会などの地域コミュニティの活動も停滞・消滅へと向かいつつあります．一方で，そのような状況を乗り越えようと頑張っている自治体もあります．**市民講演会も「地質学を活用して，地域イノベーションを共創しよう**」というテーマで行い，学会が地質学という切り口で，地域社会とともに課題の解決に取り組みたいという意欲を表しています．

今回の大会は，愛媛大学城北キャンパスでの開催となります．城北キャンパスは，松山城のすぐ北側に位置し，ダウンタウンから徒歩で10分という極めて利便性の高い場所です．気晴らしに散歩をしながら，松山城・道後温泉などの観光地めぐりや，愛媛県の秋の味覚を手軽に楽しめるのが特徴です．

なお，来年の10月は国体が愛媛県で開催されるため，その数か月前から９月以降にホテルの予約が困難になると予想されています．愛媛大会に参加される会員の皆さんは，是非，早めの予約をお願いいたします．

愛媛大会の成功に向けて，大会実行委員会，愛媛大学理学部・社会共創学部，四国支部幹事一同努力を重ねております．実りの多い大会になりますよう，皆様のご参加を是非お待ちしております．それでは，松山でお会いしましょう．

日本地質学会第124年学術大会（愛媛大会）実行委員会
委員長　榊原正幸

トピックセッション募集　締切2017年３月13日（月）

日本地質学会行事委員会

第124年学術大会（愛媛大会）は，四国支部のご協力のもと，愛媛大学理学部（松山市）をメイン会場として2017年９月16日（土）～18日（月）に開催されます．四国では，南海トラフで想定される巨大地震による津波の予測波高が，東日本大震災以降大幅に引き上げられました．地質学会学術大会は，地震災害や防災に関心を持つ一般市民の方をはじめ，多くの方から注目されるものとなるでしょう．愛媛大会では，多くのセッション開催を可能にするよう，必要十分数の会場（部屋）を確保する予定です．ポスター会場については，近年のポスター発表重視の方向を満たすスペースを確保します．トピックセッションを下記要領で募集します．本大会も前回同様，シンポジウムの一般募集はありません．シンポジウムは愛媛大会実行委員会および学会執行部が企画します．

１．セッション概要

セッションは例年通り「レギュラーセッション」,「トピックセッション」,「アウトリーチセッション」に区分します．レギュラーセッションは前回の東京・桜上水大会と同じ25タイトルを予定しています（レギュラーセッションは３月下旬に行事委員会が決定します）．

２．トピックセッション募集

トピックセッションは，広く地質学の領域に属し，これから新分野あるいは注目すべき分野になりそうな内容を扱うものとします．形式はレギュラーセッションと同じです（口頭発表およびポスター発表：口頭発表は15分間で，進行も15分刻み）．多くの参加者が見込まれる，魅力あるセッションを積極的にご提案ください．締切後，行事委員会が応募内容を慎重に検討し，最大８件程度のトピックセッションを採択する予定です．

３．トピックセッション招待講演

トピックセッションの招待講演には前回（東京・桜上水大会）と同じルールを適用します．

１）招待講演は１セッションにつき最大２名とし，会員，非会員を問いません．世話人が「自分を招待する」ことは認めません．
２）発表時間（質疑応答を含む）は世話人が15分または30分のいずれかを選択できます．なお，１人の発表者（招待講演者を含む）が１つのセッションで口頭発表できるのは１件です．
３）招待講演者の選定理由とその裏付けとなる情報（セッションテーマに関連した代表的な論文，著書等）が必要です．
４）会員招待講演者が招待講演の他に非招待の発表を１件申し込む場合，発表負担金はかかりません．さらにもう１件（招待講演の他にセッションで２件）発表する場合は負担金がかかります．

４．応募方法

トピックセッションを応募する会員は，次の項目内容を日本地質学会行事委員会宛（main@geosociety.jp）にe-mailでお申し込み下さい．

１）代表世話人（＝連絡責任者，会員に限る）の氏名（和・英），所属（和・英），メールアドレス，緊急時の電話番号
２）セッションタイトル（和・英）
３）共同世話人の氏名（和・英），所属（和・英），メールアドレス
４）趣旨・概要（400～600字）
５）招待講演の有無
　有の場合
　5-1）招待講演者の氏名（和・英），所属（和・英），会員/非会員の別
　5-2）招待講演の発表希望時間（15分または30分）
　5-3）招待講演者の選定理由（100～200字）
　5-4）選定理由の裏付けとなる，セッションテーマに関連した代表的な論文・著書等
６）他学協会との共催希望の有無，有の場合は名称
７）時間（原則半日（３時間）以内ですが，詳細はお問い合わせください）
８）地質学雑誌またはIsland Arcへの特集号計画の有無（できる限り特集号を計画してください）
９）その他（英語使用等）

５．採択方法

応募多数の場合や他セッションと内容が重複する場合，行事委員会は学術的なインパクトや緊急度を考慮して採択を決定します．採択されたトピックセッションはニュース誌５月号（５月末発行予定）で公表し，講演募集を行う予定です．演題登録（講演申込，要旨投稿）締切は７月５日（水）を予定しています．

６．非会員招待講演者の参加登録費

非会員招待講演者に限り参加登録費を免除します（ただし要旨集は付きません）．

７．世話人が行う作業（７月）

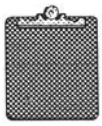
代表世話人には，講演要旨校閲，講演順番決定などの作業を７月中旬に行っていただきます（詳細は採択後にお知らせします）．その期間，代表世話人は電子メールで添付ファイルを送受信できるようにして下さい．野外調査や乗船等で通信が制限される場合は，共同世話人（代理）にあらかじめ作業を依頼し，その旨を行事委員会に必ず報告してください．

ご不明の点があれば行事委員会（main@geosociety.jp）までお気軽にお問い合わせください．

愛媛大会に向けてのスケジュール（概略）

例年とほぼ同じ日程です．各項目に関して，余裕をもってご準備をお願いします．

３月13日（月）TS募集締切
５月下旬（ニュース誌５月号）大会予告記事．演題登録・講演要旨受付開始
７月５日（水）演題登録・講演要旨受付締切．ランチョン・夜間小集会申込締切．
８月上旬　巡検参加申込締切
８月中旬　大会参加登録・懇親会参加申込締切
９月16日（土）～18日（月）地質学会第124年学術大会（愛媛大会）
９月19日（火）～21日（木）ポスト巡検



ご案内

本会以外の学会および研究会・委員会からのご案内を掲載します.

第54回アイソトープ・放射線研究発表会発表論文の募集

主催：日本アイソトープ協会
共催：日本地質学会ほか
会期：2017年７月５日（水）～７月７日（金）
会場：東京大学弥生講堂（東京都文京区弥生１-１-１）
発表論文の申込締切：2017年２月28日（火）17:00
要旨原稿投稿期間：2017年３月１日（水）10:00 ～ ４月13日（木）17:00

発表論文の内容：各研究分野において，専門的な成果を得た放射性同位体，安定同位体や放射線の利用研究，およびこれら利用の基礎となる研究とします．発表論文には未発表の部分が含まれていること.
発表者の資格：発表者または共同発表者のうち一人が本発表会の主催，共催または協賛学・協会の会員であること
申込方法：日本アイソトープ協会WEBサイト（http://www.jrias.or.jp/）内の専用ページからお申込下さい.

問い合わせ先：アイソトープ・放射線 研究発表会 事務局
公益社団法人日本アイソトープ協会
学術振興部　学術・出版課
TEL：03-5395-8081　FAX：03-5395-8053
e-mail：gakujutsu@jrias.or.jp

第10回 白亜紀国際シンポジウムのお知らせ

10th International Symposium on the Cretaceous（10th ISC 2017）

４年毎に行われている白亜紀国際シンポジウムが，本年，オーストリア・ウィーンで行われます．2013年９月にトルコ・アンカラの中東工科大学で行われた第９回に引き続くものですが，今回はIGCP（地質科学国際研究計画）609「温室期の気候－環境悪化：白亜紀の短期海水準変動の原因と結果」（略称：「白亜紀海水準変動」）のリーダーである．ウィーン大学のMichael Wagreich 教授がホストとして行われます.

IGCP608としてもセッションを設けていますので，白亜紀研究に関する最も大きな地球科学系（地質・古生物）国際会議として，是非積極的な参加をお願いします.

日程：2017年８月21日（月）～ 24日（木）
会場：オーストリア・ウィーン
UZA Ⅱ（Universitätszentrum Althanstrasse）
セッション：
T1. Cretaceous stratigraphy
T2. Cretaceous setting and facies
T3. Cretaceous events
T4. Cretaceous Greenhouse World: Climate and sea-level changes
C06 Asia-Pacific Cretaceous Ecosystems（IGCP608）
Conveners: Ando, Hisao; Li, Guobiao and Xi, Dangpeng
T5. Cretaceous palaeontology
T6. Cretaceous hydrocarbon and mineral deposits
T7. Cretaceous geodynamics and orogenies and the evolution of Tethyan Realm
プレ巡検４コース：
８月17-20日　上部白亜系-古第三系北西テチス縁辺（オーストリア，ドイツ南部）
８月19日　下部-中部白亜系（スロバキア西カルパチア）
８月20日　ウィーン市内の白亜紀の建築石材
８月17-19日　フランスDrôme地方の白亜系重要セクション：Vlg., Hau., Brm., J/K境界
ポスト巡検３コース：
８月25-27日　チェコ・ボヘミア堆積盆の上部白亜系のCen.-Tur.およびTur.-Con.境界層
８月25-28日　浅海炭酸塩プラットフォーム（詳細未定）
８月25日　Eduard Suessの足跡：ユースターシーと海水準変動．エッゲンブルク

重要な日程：
要旨締切：2017年２月15日
早期登録：2017年４月15日（€50割引）
通常登録：2017年８月１日
後期登録：2017年８月２日～（€50割増）

すでに登録は下記Websiteで受けつけていますので，下記でご確認下さい.
https://10cretsymp.univie.ac.at/home/
連絡先：congress@univie.ac.at
IGCP608リーダー　安藤寿男（茨城大学理学部）

IGCP608「白亜紀アジア－西太平洋生態系」の第５回国際研究集会 1st Circular配付のお知らせ

2013年３月より活動を始めたIGCP（地質科学国際研究計画）608「白亜紀のアジア－西太平洋地域の生態系システムと環境変動」（略称：「白亜紀アジア－西太平洋生態系」）も５年目の最終年を迎えます．このたび第５回国際研究集会を案内するFirst Circularの配布を開始しましたので，皆様にご案内します.

IGCP608 第５回　国際シンポジウム
2017年10月26日（木）～27日（金）
・開催場所：韓国　済州島（市）
済州国際コンベンションセンター
・開催母体：IGCP608第５回国際シンポジウム実行委員会　委員長：鄭 大教 Daekyo Cheong（韓国 江原国立大学 教授，前大韓地質学会会長）
・巡検：10月23日（月）～25日（水）韓半島南岸慶尚堆積盆西部の非海成相（白亜紀前期の多様な恐竜足跡・卵殻化石層と湖成・河川堆積相）

今回は大韓地質学会創立70周年記念行事の一貫として開催されます．巡検はプレ巡検として，韓半島南西岸の下部白亜系の慶尚超層群とその相当層を見学する予定です.

重要な日程：
2017年３月１日　第一次参加登録　締切
2017年４月１日　Second Circular　配布
2017年７月15日　発表要旨　締切
2017年９月１日　最終 Circular 配布（シンポジウムプログラム　発表）

First Circularおよび申込書は，IGCP608のWebsiteからダウンロードできます.
http://igcp608.sci.ibaraki.ac.jp/index.php?id=72
http://igcp608.sci.ibaraki.ac.jp/index.php?id=5#Fifth International Meeting

白亜系を対象とする研究推進・発表の場として，積極的な参加をお願いします.

連絡先：dkcheong@kangwon.ac.kr
IGCP608リーダー　安藤寿男（茨城大学理学部）

各賞・研究助成

日本地質学会に寄せられた候補者の募集・推薦依頼等をご案内いたします.

富山県奨学金返還助成制度 助成対象者募集

富山県では，地域産業の中核人材となる理工系の大学院生及び薬学部生（以下「大学院生等」という.）のUIJターン就職を図るため，県内の中堅・中小企業（以下「登録企業」という.）に対象学生が就職した場合に，富山県と登録企業とで出捐した基金により，

奨学金の返還を助成いたします．つきましては，助成対象となる大学院生等を募集いたします．

助成対象：
(1) 助成対象となる大学院生等
　助成対象となる大学院生等（以下「助成対象者」という．）は，次の各号のいずれにも該当する者とします．
① 平成30年３月に修了若しくは卒業予定の県外の理工系大学院生（修士課程（博士課程前期課程を含み，一貫性博士課程は除く．））又は６年制課程の薬学共用試験に合格した薬学部生
② 大学院修了又は薬学部卒業後，登録企業に就業を希望する者
③ 個人情報（住所，氏名，年齢，性別，在籍学校名，連絡先等）を登録企業へ提供することを承諾する者
(2) 対象奨学金
　日本学生支援機構の無利子（第１種）奨学金又は富山県奨学資金

助成の内容：
(1) 助成要件：大学院等修了後，平成30年４月末日までに登録企業へ就業し，奨学金を返還していること．
(2) 助成額：貸与された奨学金の種類及び就職した登録企業の助成区分に応じ，各年度に助成対象者が実際に返還した額に相当する額を支払います．
(3) 助成方法：毎年度末に，その年度に返還した奨学金の額に相当する額を助成対象者本人へ支払います．登録企業において，10年間就業が確認できた場合は，奨学金残額を日本学生支援機構等に一括して支払います．ただし，自己都合等により退職した場合は，その時点で助成は打ち切りとなります．

登録企業：登録企業とは，「富山県奨学金返還助成制度登録企業募集要綱」に基づき応募のあった企業です．別途公開する登録企業一覧によりご確認ください．

募集締切：平成29年2月28日（火）
問合せ先：
富山県商工労働部労働雇用課雇用対策係
〒930-8501 富山市新総曲輪１-７
TEL 076-444-8897，FAX 076-444-4405
助成制度の詳細，応募方法等は，下記よりご確認ください．
http://www.pref.toyama.jp/cms_sec/1303/kj00017272.html

公募結果
広島大学大学院理学研究科・教授又は准教授
藪田ひかる（広島大学大学院理学研究科准教授）平成29年１月１日着任

紹　介

地質職人たちのアーカイブス

六連星の会　編者

〈郁朋社，2016年10月27日 発 行，Ａ５版，262頁，ISBN978-4-87302-630-5　C0051，定価1,620円（税込），〉

本書のタイトルにある「地質職人」とは，地質屋として現地観察，調査を主とする職人的な専門技術者を指している．著者６人の共通点は①青春のある時期を九州の鹿児島本線の沿線で過ごしたこと，②大学の理学部で地質学又は地形学といわれる自然科学を専攻し，以後の人生の大半を地質技術者（地質職人を自称している）として全うしたと自負していることである．さらに言えば，全員が第二，第三の人生を歩むいわゆる定年退職者である．

著者たちの共通認識は地質技術者が社会貢献しているにも関わらず，その現状が社会に知らされていないことであった．このため，著者らのこれまでのささやかな体験や想いを書き残し，地質職人たちへの理解の助けにしてもらうと同時にジオロジーの多様性と面白さをも伝えたい思いで本書を執筆している．以下に本書の概要を執筆者ごとに示す．

中尾健兒氏の「ある地質技術者の追想」は建設会社に就職し携わったプロジェクトで特に記憶に残っている「富士山山頂レーダ基地建設」，「瀬戸大橋建設」，「アフリカの砂漠地帯の緑化」の３つの体験談から始まり，「大地震－新潟地震（液状化），兵庫県南部地震（活断層），3.11東日本大震災（地質技術者の役割）」，「今，ジオロジー（Geology）について思うこと」が書かれている．体験談はプロジェクトの実態が書かれており“事実は小説よりも奇なり”のとおり面白く読ませていただいた．地震災害と地質技術者は「地質現象の実務への適用」を標榜してきた者として果たさなければならなかった役割が示されている．自然科学と実用工学の二面性を持つ地質学及び地質技術，特に地質技術者の活動を広く世に知らしめることは，科学がどう社会に貢献しているかを広宣することに有効な手段と提言している．

奥園誠之氏の「斜面防災対策における地形地質情報の見逃し体験記」は高速道路を中心に全国の斜面・のり面を見てきた中で筆者を含めた高速道路建設現場技術者が対面した「誤診」というよりも地盤情報の「見逃し」によって引き起こした地すべり災害対策事例が紹介されている．失敗事例は①深部の変状および背後の古期地すべり地形の見逃し，②初生型の地すべりが起こりやすい凸状尾根型丘陵地に対する認識不足，③後背地の異常地形の見逃し，④大崩壊を起こしそうな地質構造に対する危機感の不足とのり面背後の陥没帯の見逃し等である．筆者は「木を見て森を見なかった」として「後背地の地形の精査を怠ったこと」，「深部の地質情報の把握が甘かった」と反省点を整理している．地質屋を中心とした理想の技術者は木も森も分け隔てなく観なければ一流とは言えないとしている．斜面防災における理想の地質系技術者は自己研鑽し，土木の分かる地質屋で，砂防に詳しい地質屋といった境界領域に入り込み，地質に対して造詣の深い土木屋や砂防屋の仲間を増やし，学協会の活動で活躍することで，広く市民権を獲得することだとしている．

古部浩氏の「私が判断に迷った地質事象」は建設会社で土木地質分野に従事する傍ら大学の非常勤講師を務め，実務と教育の両面で活躍された地質技術者が判断に迷ったあるいは間違った解釈をした10の事例を紹介している．建設会社での地質屋の仕事は研究所配属でシールドセグメントの計測，青函トンネル工事での切羽の地質スケッチ，本社勤務で設計図書の地質語を翻訳することに従事した．その後，建設会社が安全や利益に関することに地質の知識が役に立つことに気づき，施工トラブルの予知・予測に重点を置くように変化してきたとのこと．ここでも地質技術者の出番が実務として認識されてきたことが伺える．事例は簡潔な図で説明されて教訓が記載されている．土木地質の主要な事項が整理されており，同分野に関わる技術者には参考になる．

桑原啓三氏の「地質地形の薦め」は建設省・外郭団体・民間コンサルタントにおいてダム地質分野で活躍された豊富な経験から「岩盤地すべりの始まり」，「地形をよく見よう」，「地質地形の薦め」，「マスムーブメント」が書かれている．地形については著者自らが

勉強のため業務が終えた後に大学の研究室に通ったと聞いている．ダム地質の第一線の地質技術者が経験した事例は建設コンサルタントに勤務する技術者にも共感を与える内容である．また，マスムーブメントの項では筆者がまとめた「地すべり地質分帯区分」が示されている．斜面防災に関わる地質技術者には「地すべり分帯の考え方」と「区分」，「岩相および分布の特徴」が参考となる．

若佐秀雄氏の「地質職人目線のトピック」は地質コンサルタントでの体験と環境調査会社の経営者の経験から地質学と地球環境の視点で「注目を浴びた鉱物」，「ディープインパクト」の話題が書かれている．注目を浴びた鉱物は「アスベスト（石綿）」である．これが中皮腫という健康被害を引き起こす有害物質であることに気付かなかった背景，産業材料として技術革新をもたらしたこと，日常生活において科学技術の成果により「利便」，「安全」，「安心」を提供しているものとは裏腹にリスクが潜んでいることを示唆している．ディープインパクトは地質時代でいう中世代と新生代の変わり目に天体衝突という大事件のことを分かりやすく解説している．二億年に一度という時間スケールが桁違いであるが，それを解明していくジオロジーの多様性と面白さも感じられた．

今村遼平氏の「国民の防災意識をどう向上させるか」は防災分野で活躍している地質技術者が自然災害の軽減に向けて自らの体験を通して自分の思いを述べている．筆者は2014年８月に起きた広島土石流災害の実態をみて，どうして土石流の直撃を受ける場所に住居を建てるのだろうか，防災コンサルタントとして幾度となく警鐘を鳴らしているのに自分自身が情けなくなると嘆いていたことを想い出す．それが筆者の「私の思いのたけを思う存分述べて，一介の技術者としての“遺書”としたい」という表現になったと思われる．内容は，「繰り返される土石流災害」，「『防災』を叫ぶ割りには，その基礎科学技術に対する為政者の理解なさ」，「国民の防災についての“無知”の原因」，「今時の大学生の現状」，「わが国における大学教員の評価」，「私たち専門職はどうあるべきか」，「技術者の責任」，「技術レベルが低いのは非倫理的だ」，「最近の若い地形地質技術者の問題点」が書かれている．筆者のものの見方・考え方と忌憚ない主張が述べられており，読み応えのある内容になっている．

本書を通読して感じたことは，ここに登場する地質職人は地質技術に関するプロフェッショナルであること，そして幅広い視野でものを見て考えているということである．筆者６人の思いである「アーカイブス」を皆さんに共有していただき地質技術を国民へ知ってもらい社会貢献していくため，日本地質学会で民間企業に所属している会員はもちろんのこと，官公庁，学校関係者などの多くの会員にご一読をお薦めする．

（**足立勝治**）

深海底の地球科学

藤岡換太郎　著

〈朝倉書店，2016年11月15日発行，Ａ５判，212ページ，ISBN978-4-254-16071-0　C3044
定価3,672円（本体3,400円＋税）〉

本書は，深海底の地球科学に焦点をあてて，幅広い多面的方法で感性あふれる行動的な体験を基にした世界観察を４次元的に記した著者渾身の一冊である．本書は，一般的な事項の説明を主とするいわゆる教科書でありながら，また同時に著者の体験を基にした読み物（ある種のノンフィクション）でもある．教科書は，知識の紹介とその原理や仕組み，現象の客観的な理由付けなどを中心とするのに対して，読み物は，体験や事実を紹介しその道筋や歴史的経緯，重要性などの，主として主観的な説明を中心とする．しかし，本書には両者が同居している，しかも著者自身の科学的研究の現場の実態とともに描かれている，という一大特徴を持つ．このような書物は，海洋野外研究の第一人者であった著者において初めてなされ得たことである．なお，本書のキーワードを一語で表すとすると，「海洋底地球科学による世界一周」であろう．

戦中・戦争直後生まれの地質学研究者は，学部学生か大学院生の間（1960-1970年代）に，地向斜造山論からプレートテクトニクスへの劇的な「革命」に遭遇した記憶を持っている．そのころには，価値観の転換というよりは，よって立つ大原理が何に準拠するのか，という基盤の根底の変化であったから，何をよりどころに（信用して）今後生きて行ったらよいのか不安でもあり，また新しさに希望を持ちもしただろう．当時は，プレートテクトニクスは，ニューグローバルテクトニクスという用語で語られていた．大陸移動という言葉がまだ残っていた．海洋底拡大説，つまりプレートテクトニクスの基本の発想や基礎は，はじめ海洋底の地磁気縞異常などの海洋地球物理学から始まったのだが，そうした「パラダイムの転換」に，地質学界がどのように反応したかは，さまざまな書物で語られているものの，真実がすべて語り尽くされているとも思われない．

本書は，そうした学問の革命的変化の時代に（著者の年譜には1974年とある），変成岩の研究から海洋地質学へ転進した著者の一代記の形を取りながら，深海底研究の現場の様子を，自然科学者の目で見直した好著である．著者の研究者としての船上や研究会，学会などでの実話をもとに，そのころのサイエンスの発展を，テーマや地域ごとに網羅したものである．プレート収束境界だけでなく，水平すべり境界，拡大境界にまで，ほとんどのテーマが，著者本人の実際の研究現場からの報告として語られている．そこには概念の発端，用語の出所と定義，実体のキャラクタリゼイションなどの，基礎的な事項も英語用語の紹介とともに記述されている．新しい研究分野の進展が，一般性と個別性とともに，地域と研究方法を伴って語られている．内容的には全９章にわたって，世界各地の深海底における地球科学（生物学をも含む）の興味深いトピックスを取り上げつつ，平易に解説されており，太平洋中央海嶺，トランスフォーム断層，海洋プレートの化石（オフィオライト），海溝，背弧海盆，海山や海台，深海底に生息する生物などの，深海底地球科学関連のすべての重要事項が記述されている．さらに，終章（後述）のあとに，参考文献および索引がついている．それぞれの章に，現在のトピックスやさらに深く学びたい読者のために，先端の研究の紹介もなされている．このような幅広い分野の書物が一人の著者によってなされたことに驚くばかりである．著者は，世界のほとんどの海域の研究航海に多数参加し，第一線の研究者として世界的な研究者とともに最新のテーマに取り組んだ，まさに世界初，世界最高の研究現場を経てきた所以である．世界初，世界最深，世界最多などのいわゆる「ギネス」級の研究に，著者がこだわってきたことも知られている．本書の構成と内容は，著者のこうした体験そのものと言える．

海洋研究は一人ではできない．研究航海の立案から船の方々（運航，技術など）との打ち合わせ，実際の航海での日ごとの実際の作業工程のロジスティックスなどは多分野にわたる科学技術だけでなく，人間的な要素をも持っているものである．しかも，相手は無限に広がる深海の世界である．その時に発揮されるのが，基礎的な能力だけでなく，経験と人間的な要素と感性である．最後の2者は，簡単には言い表せないが，船上の多くの人々との間の阿吽の呼吸である．安全第一でしかも世界初を狙う深海相手の研究は，単なるサイエンスだけでなく（それが基本であること

に違いはないが），技術と経験の世界でもある．最新鋭の機器や装置の運転（ノウハウ）などが，瞬時に判断・実行できるように理解していないといけない．行程が複雑な装置は，一か所の判断ミスも許されない緊張の連続である．それが本書の著者にかかると，不思議とうまく行くのである．本書には，さまざまな実例（大半が著者が参加した航海（多くは首席研究者として，一般的な観測航海，掘削航海，とりわけ潜水航海））を交えて，学問の発生・発展として紹介されている．本書の内容のレベルはさまざまであるが，理科系（自然系，工学系，環境系など）の学生のほか，そのほかの学部学生（例えば教養部や，文科系，経済系，社会系，人間系など）や一般市民にも分りやすく説明されているのが特徴である．それを統一的に表した部分があるので，以下に紹介したい．それは，深海底の科学の分野は，科学技術の進展とともにあったのは周知の通りであるが，現場で発揮されるのが博物的な知識とその応用である，という下りである．さらに，特に潜水船に乗船する研究者（普通は１名）は，「深海底の博物学」を目指すべきだ，また，潜水船のパイロットこそが現場で鍛えた優秀な博物学者である，という．けだし，名言というべきだろう．本書は，類似のタイトルの前作（「深海の科学」NHKブックス）の出版から20年もたっているというが，その間の進展をほとんど取り込んでいる．ただし，本書にも記されているように，「ちきゅう」や「ジョイデス・レゾリューション」などによる最近の掘削研究については，その多くを他書に譲っている．しかし，瞠目すべきは，終章における80日間世界一周海洋底版の提案である．筆者も，世界80日間海外地質旅行を書き始めたところであったが，見事に先を越された．本書を，高校以上の学生・院生諸氏（分野を問わず）および自然科学に興味を持つ持たないを問わず，広く国民に推薦する次第である．

なお，最後に用語の問題を１，２正したい．最近，地震学の分野では，「伝搬」を使うようである．すでに多くの使用例があるが，ある辞書によると，伝播を「デンパン」と誤読したのが始まりという．言語は生きているので，本来の使用法あるいは旧態依然とした事例のみを強調する弊害もあろうが，一言追記する次第である．また，本書にはないが，ある著名な地震学者は，アコスティックはもはや修正できないだろう，とも述べている（正しい発音表記は，アクースティック）．筆者は，アクセントのあるシラブルは正しく表記すべきだ，との持論を持っている．その他の例は，何度も強調するが，リザーバー（正しくは，レザヴォア；アクセントはレ），リソスフェア（正しくは，リソスフィア）である．用語集を再検討する時が来ていると思われる．

（**小川勇二郎**）

地質リーフレットたんけんシリーズ5

長瀞（ながとろ）たんけんマップ

荒川（あらかわ）が刻（きざ）んだ地球の窓（まど）をのぞいてみよう

「ジオパーク秩父」の
重要なジオサイトのひとつ
長瀞のたんけんマップができました

編集：日本地質学会長瀞たんけんマップ編集委員会
（高木秀雄・本間岳史・露木和男）
発行：一般社団法人日本地質学会
A2 版８折　両面フルカラー印刷

定価400円
（会員頒価300円）
※20部以上ご注文の場合は割引あり

購入希望の方は、学会事務局まで．e-mail：main@geosociety.jp　電話：03-5823-1150

地質リーフレット４

日本列島と地質環境の長期安定性

好評発売中

地質環境の長期的利用の観点から、日本の地質環境を分かりやすくまとめたリーフレット。最新のデータに基づき、日本列島の断層運動、火山・マグマ活動等の特徴、そして将来予測の考え方を示しています。多くの方々に活用して頂けることを願っています。

定価600円
（会員頒価500円）
（20部以上の場合割引あり）

2011年1月発行　B2版　両面フルカラー
編集　一般社団法人日本地質学会　地質環境の長期安定性研究委員会
発行　一般社団法人日本地質学会

地質リーフレットシリーズ1～3も
好評発売中！

購入希望の方は、学会事務局まで。 e-mail: main@geosociety.jp　電話 03-5823-1150

学協会・研究会報告

IAGR 2016年総会と第13回ゴンドワナからアジア国際シンポジウム参加報告

吉田　勝（ゴンドワナ地質環境研究所）・**角替敏昭**（筑波大学）

表題の会が2016年11月18～21日に南インドケララ州の州都トリバンドラムで行われた．直前の18日には Elsevier Author Workshopが，直後の22日～23日には野外巡検が南インドグラニュライト地域で行われた．以下には筆者らが参加しなかった野外巡検以外について報告する．

会議の会場はトリバンドラムの中心街にあるResidency Tower Hotelで，立派な会議場や大きなプールのある一流（？）のホテルであった．登録参加者は16か国から107人であったが，会議ビザの取得問題や新紙幣発行による現金不足のため，30人近くが参加キャンセルとなった．なお，登録参加者以外に現地の大学生・院生ら数十人が参加し，参加者総数は百数十人であった．現地の学生・院生を除く国別の参加者は，インド：65人，日本：5，オーストラリア：4，韓国・中国・トルコ：各3，ロシア・スリランカ・香港：各2，バングラデッシュ・英国・アラブ首長国連邦・南ア・オマーン・タイ：各1であった．講演は口頭発表32題とポスター40題で，平行セッションはなかった．

18日は朝から1日一杯，**Elsevier Author Workshop“How to get published in an international high impact journal”**があった．ここにはシンポジウム参加者のほとんど全員が参加し，なかなか盛況であった．このワークショップはエルゼビアのシニアパブリッシッシャーMs. Fernanda OgochiとGondwana Research編集長のM. Santoshのほか，国際誌の編集者ら6人が講師役で，最先端の国際誌に投稿し，査読を受け，受理され，さらに出版後に至るまでの問題点と取り組みのノウハウの講義で，多くの直截な質疑応答で丸1日，熱気溢れる会であった．

18日夕方にはIAGR2016年会の**アイスブレーカー**があり，M. Santoshと吉田によって二十数年まえのゴンドワナニュースレターからGondwana Researchに発展してきた経緯や，1996年のトリバンドラムでの第2回IAGR総会の思い出が紹介された．

19日は9時から30分間の開会式があり，大会組織委員長のE. Shajiらのあいさつ等があった．テクニカルセッションは9時30分から，第1セッション「**Supercontinent Tectonics**」がG. ZhaoとC. Manikyambaの座長で始まった．冒頭2時間，以下の4題の基調講演“The mistery of Hadean Earth and primodial life”（M. Santosh），“The formation of regional scale UHT metamorphic terrains through earth history”（C. Clark），“Subduction record of the East African Orogen in a whole plate topological framework”（A.S. Collinsら），“Migmatites, charnockites and crustal fluid flux: the Pan-African granulites of southern India”（I. C.W. Fitzsimonsら）があった．引き続いてM. E. RizeliとS. Deyによる一般講演2題があり，その後ランチブレークとポスターセッションが1時間20分あった．

午後の**第2セッション**は「**Tectonics and Correlation of Columbia, Gondwana and Asia**」で，前半はC. Clark とS. N. Kumarが，後半はA. S. Collins とT.R.K. Chettyが座長を務めた．基調講演は1題で“200 Myr history of crustal melting in Gongga Shan, constraints on the tectonics of eastern Tibet from the Triassic to present-day”（N.M.W. Roberts and M.P. Searle），その後は9題の一般講演がF. Karaoglanら，V. P. Sukhorukov & O. M. Turkina，J. Liら，M. Akssayら，D. Lakshmiら，G. Parthasarathyら，C. Manikyambaら，I. Gomez-Perezら，L. Shu & J. Yaoによって行われた．

テクニカルセッションの後には**IAGR総会**があった．まず例年のCultural Exchangeがあり，参加者所属国得意の歌唱が次々と飛び出し，わが日本勢は“上を向いて歩こう”を5人で合唱して満場の拍手・喝采を受けた．その後2015年 Gondwana Research最優秀論文賞“ The origin and significance of crustal minerals in ophiolitic chromitites and peridotites”（GR 27-2, by P. Robertson et al.）が発表され，筆頭著者のP. Robertsonに賞状やメダルがIAGR選考委員長，IAGR会長や名誉会長から手渡され，満場の祝福を受けた．バンケットの後にGondwana Researchの編集委員会があり，同誌のインパクトファクターが8.743で，Nature Geoscienceの次に高いことなどが報告された．

20日は午前中一杯が第2セッションの続きで，前半はI. C. W. FitzsimonsとT. E. Johnson，後半は角替とV. J Rajeshが座長を務め，B. Maibamら，N. H-C. Chen & G. Zhao，I. Hossainら，K. Randive & S. Lanjewar，S. Ganguly，L. Tangら，Y. Eyuboglu，K. V. W. Kehelpannalaら，O. P. Pandey & K. Chandrakalaによる一般講演9題が発表された．

20日午後の前半は**第3セッション**「**Life and Environment**」で，R. Tewari とS. Dayが座長であった．R. Tewari による基調講演“Glossopteris flora from the Gondwana Valley coalfield, Telangana, India: Basinal correlation and implications in palaeoecology”があり，引き続いてK. J. Singhら，D. Agnihotri & R. Tewari，S. S.

Elsevier Author Workshop．壇上で質問を受ける講師達．左からF. Ogochi, G. Zhao, C. Clarke, T. Johnson, A. Collins, T. Tsunogae, M. Santosh

K. Ppillaiによる３題の一般講演が発表された．

午後の後半は**第４セッション「Evolution of Southern Granulite Terrain: Correlations and Connections**」となり，N. RobertsとA. P. Pradeepkumarが座長を務め，一般講演５題がT. R. K. Chetty，T. E. Johnsonら，V. J. Rajesh，M. Satyanarayananら，K. S. V. Subramanyamらによって発表された．

テクニカルセッションのあとには**最優秀学生ポスター賞**の発表があり，筑波大前期博士課程２年生高村悠介君らによる“U-Pb geochronology of detrital zircon from Sri Lanka and East Antarctica: Implications for the regional correlation of Gondwana fragments”が受賞した．また，来年のIAGR総会がタイのバンコクに決まったことが発表され，A. S. Collinsが一言紹介した．

夜は参加者は三々五々に街に出ての夕食となった．一方Hotel Windsor Rajuchhaniで**IAGR Executive Council Meeting**があり，2015年の事業報告，経理報告と2016年の事業計画等が承認され，また，来年以降のIAGR総会についての話題があった．

以下に筆者ら各々の個人的感想等を記述する．

吉田：トリバンドラムはM. Santoshとの出会いや第２回IAGR総会などIAGRとGRの創設・創刊当時の思い出深い街であり，十数年ぶりの訪問はなんとも感慨深いものがあった．しかし街には新しいビルが軒を連ね，きれいな自動車が溢れ，昔の面影は感じられなかった．

シンポジウムは平行セッションがなく，落ち着いて聞くことができた．講演・ポスターとも，インド北西，北東，中部から南部まで，多くの報告があり，ジルコンやモナザイトの年代データ多数を示す報告が多く，興味深く聞くことができた．とりわけ，B. Maibamらによる北東インドNaga変成岩中のジルコン年代と化学組成に基づく供給地推定，K. Basakらによる北西インドMangalwar岩体の変成岩岩石学とモナザイトEPMA年代研究から超大陸コロンビアの集合（1.9-1.8 Ga）・分裂（1.4 Ga）とロディニアの集合（1.0 Ga）テクトニクスの議論や，I. Hossainらによるバングラデッシュの先カンブリア代（1.8 Ga）基盤のインド中央構造帯との対比などが注目された．私はかつて高ヒマラヤ片麻岩の砕屑性ジルコン年代分布から，源岩の供給地推定を行ったが，上記３題の報告はその問題との関連で興味深かった．

角替：開催直前に出された高額紙幣を使用禁止とするインド政府の決定により，大きな混乱が予想されたが，大会運営は非常にスムーズで特に問題はなかった．今回の発表内容は南インドのグラニュライト岩体に関するものが多く，どれも興味を引かれるものばかりであった．特にIan Fitzsimonsによるパッチ状チャノッカイトの成因についての講演は，同じ岩石を研究している者として大変興味深かった．今から116年前に南インドで初めて記載されたチャノッカイト（斜方輝石を含む花崗岩質岩）であるが，その産状からドライな花崗岩質マグマからの成因が考えられている．しかし，1960年にPichamuthuによって発見されたパッチ状チャノッカイトは明らかに周囲の片麻状構造を切って産出しており，その成因としてCO_2に富む流体の浸透が検討されてきた．Fitzsimonsの研究例では選択的部分溶融に伴う斜方輝石の結晶化によるパッチ状チャノッカイトの形成を議論していた．ただし，部分溶融組織を全く持たない例も多く，類似した産状を示すパッチ状チャノッカイトが実は様々なプロセスによって形成されたことが考えられる．また，花崗岩質でありながら特徴的に暗褐色を呈する原因はいまだに分かっておらず，今後の更なる研究が待たれる．

全体的に良くオーガナイズされた学会であり，友人であるケララ大学のShaji博士の尽力には頭が下がる思いである．最後に，指導学生が最優秀ポスター賞を受賞したことは大きな喜びであり，選考委員のN. Roberts，S. Ganguly，S. Kwonの各氏には感謝申し上げる．

写真左から，最優秀論文賞を受けたP. Robertson氏．第３セッションで基調講演をするR. Tewari

表紙写真：

半化石の浜（第６回惑星地球フォトコンテスト：佳作）

写真：天沼　彩　撮影場所：小笠原諸島 南島　詳細は，学会HP「地質フォト」参照

（左から）写真１　渕ヶ沢奥米林道の清澄層最下部付近でのルートマップ作成作業（１日目午後）．　写真２　三石山林道沿いの清澄層上部のKy26タフ（２日目午後）．七里川や東海岸でも観察する．　写真３　七里川の清澄層（手前）と天津層（奥）の境界付近におけるルートマップ作成作業（３日目午前）．　写真４　七里川の安野層中部のスランプ堆積物（４日目午前）．

2016年度秋季地質調査研修の実施報告

上記研修を2016年11月14日（月）～11月18日（金）にかけて，房総半島中部をほぼ東西に横切る清澄山系において，ゆるやかな褶曲構造をなして分布する安房層群上部（中新世後期～鮮新世）の天津層，清澄層，安野層を主な対象に行った．

本研修は，民間地質関連会社から，誰でも参加できる若手技術者向けの地質調査研修を毎年やってほしいという産総研地質調査総合センター（元の工業技術院地質調査所）への要請がきっかけとなって2007年度より始まった．初めの５年間の2011年度までは，産総研地質調査総合センターの外部研修プログラムとして，つくば市の地学情報サービス（株）の管理運営の下で行われたが，2012年度からは，日本地質学会主催，産総研地質調査総合センター共催という形で引き継がれ，今年で10年目，今回は12回目の研修である（春と夏に行った年度もある）．

2014年度までの８年間は，小櫃川支流猪の川（黒滝沢）上流の東京大学千葉演習林内でのルートマップづくりが中心的な作業だったが，千葉演習林に至る猪の川林道沿いでの崖崩れによる通行止めの継続により，昨年度同様，今年度も小櫃川上流七里川沿いでのルートマップづくりが主たる作業となった．

今回は，４社から定員６名（内女性１名）の参加があった．受付開始後数日後には定員に達し，定員数を増やせないかという問合せやキャンセル待ちの人も出るなど，参加できなかった人には申し訳なかった．これまでは，石油・天然ガス開発，地熱開発，鉱山開発などの会社からの参加が主流であったが，今回は，北海道の土木・地質コンサルタント会社から２名の参加があったのはひとつの特徴であった．講師は，徳橋秀一（産総研地圏資源環境研究部門客員研究員）と細井　淳（産総研地質情報研究部門研究員）が務めた．

以下に，各日ごとの実施内容の概要を記す．

１日目：2016.11.14（月）　曇り

午前10時30分にJR外房線君津駅に集合，近くで昼食を取った後，初日の研修先である小糸川上流の清和県民の森に向かう．途中，旅館で荷物を下ろし着替えをした後に，研修先の清和県民の森渕が沢林道に到着．午後は，清澄向斜南翼部に位置する渕ヶ沢林道及び渕ヶ沢奥米林道沿いに分布する安房層群清澄層最下部のタービダイト砂岩優勢互層の特徴や主な凝灰岩鍵層の特徴を観察．次にクリノメーターを使って層理面の走向・傾斜の測定法やルート図の作成法の練習を行った後に，実際に上記林道沿いで地質学的情報を記載したルートマップの作成を行った（写真１）．夜は，昼に作成したルートマップの清書（墨入れと色鉛筆による色塗り）を行い比較した．

２日目：2016.11.15（火）　曇り

夜半に雨が降り河川の流量の増大が予想されたことから，当初予定していた清澄背斜北翼の小櫃川上流の七里川でのルートマップづくりを変更して，午前は，前日に引き続き，清和県民の森の渕ヶ沢奥米林道沿いに分布する清澄層最下部分布域のルートマップを作成．午後は，清澄背斜北翼に位置し，小櫃川支流の笹川の片倉ダム周辺に伸びる三石山林道に行き，まずは，同林道の峠にある三石山観音寺境内周辺で安房層群を不整合に覆う上総層群基底の黒滝層（基底礫岩層）を観察．次に，同林道沿いに分布する清澄層のタービダイト砂岩優勢互層の特徴や代表的な凝灰岩鍵層であるKy26タフ（写真２）や三浦半島で名前のついたKy21（Hk）タフを観察した．さらに，三石山林道沿いにある片倉ダムによって形成されたダム湖（笹川湖）が，未固結のタービダイト砂岩を主体とする清澄層の分布域を避け，主に不透水層の泥岩から成る天津層の分布域に位置するように，ダムサイトが天津層と清澄層の境界部にあることを確認．午後の最後は，清澄背斜南翼に位置する田代林道沿いの天津層と清澄層の境界部を観察し，前日の清澄向斜南翼の渕ヶ沢林道沿いで観察した凝灰岩鍵層の一部を再確認した．夜は，ルートマップの清書作業を行うとともに，講師による昔の野帳に記載されたルートマップなどを閲覧．また，テキストを使って研修地の地質や地層を学習した．

３日目：2016.11.16（水）　曇りのち晴れ

午前は，清澄背斜北翼に位置する小櫃川上流七里川沿いの清澄層中部から下部（タービダイト砂岩優勢互層）及び天津層上部（多数の凝灰岩層を挟む泥岩層）の分布域を上流に向かって歩きながら，堆積物と主な凝灰岩鍵層を観察した．特に，初日の午後および２日目の午前に歩いた清澄向斜南翼に位置する清和県民の森の林道沿いで観察した清澄層最下部の厚いタービダ

（左から）写真５　七里川の安野層最上部（黒滝不整合付近）（４日目午後）．　写真６　夜の整理作業の様子（４日目夜）　写真７　七里川沿いで作成したルートマップの比較（４日目夜）．左側の頁の上端が右側のページの下端につづく．１マス（５mm）が20複歩．前半が前の頁に書かれていてみえないものもある．　写真８　ルートマップのデータを転写した5,000分の１地形図の比較（４日目夜）．

（左から）写真９　防波堤からみた勝浦吉尾漁港東方のボラの鼻（５日目午後）．黒滝不整合が清澄層上部のKy26タフ直上まで浸食している．
写真10　地質調査研修修了証書受領記念写真（勝浦海中公園：５日目午後）．参加者には，この他にCPD40単位が与えられる．

イト砂岩優勢互層中に上下に離れながら挟まれていたいくつもの凝灰岩鍵層が，清澄背斜北翼の七里川では，天津層の最上部の泥岩層中に，上下に密集して産出していることを確認した．すなわち，清和県民の森ではこの間にあった多数の厚いタービダイト砂岩層が，ここでは存在していないという岩相および層厚の顕著な変化（背斜軸部への地層の収れん現象）が認められることを確認した．このあとさらに上流に向かって歩きながら，天津層上部の代表的な凝灰岩鍵層を観察し，今度は下流に向かって引き返しながら，天津層上部から清澄層中部分布域のルートマップを作成した（写真３）．午後は，午前に引き続く形で，七里川下流に向かって歩き，清澄層上部が分布する地域の堆積物や主な凝灰岩鍵層（三石山林道でも観察したKy26タフなど）を観察しながらルートマップを作成，清澄層上位の安野層との境界部でルートマップづくりを終了した．夜は，昼作成したルートマップを清書するとともに，この地域の過去の調査や研究の成果について図面などで学習した．

４日目：2016.11.17（木）　晴れ（小春日和）

午前は，前日に引き続き清澄背斜北翼の七里川沿いで，清澄層上位の主に泥岩優勢な砂岩泥岩互層から成りスランプ堆積物も含む安野層分布域を上流に向かって歩きながら，地層の特徴や主な凝灰岩鍵層を観察した．また，清澄層型タービダイトとは特徴を異にする安野層型タービダイトの特徴についても観察した．その後，清澄層との境界部から下流に向かってもどりながら，安野層分布域のルートマップを作成した（写真４）．昼食後，午前の作業の残りである安野層最上部から黒滝不整合分布域のルートマップを作成した（写真５）．その後，東隣りの養老川流域に移動し，蛇行する養老川沿いに平行して伸びる養老渓谷中瀬遊歩道沿いで，上総層群の代表的なタービダイト互層である大田代層や梅ヶ瀬層を観察した．また，安房層群の清澄層や安野層とは特徴に異にする上総層群の大田代層型タービダイトの特徴についても，直接の観察によって理解を深めた．夜は，ルートマップの清書作業の他，5,000分の1地形図へのデータの書込み作業を行い（写真６），できあがったルートマップや5,000分の１地形図の比較を行った（写真７，８）．

５日目：2016.11.18（金）　晴れ（小春日和）

午前は，安房層群上部が堆積した前弧堆積盆（清澄海盆）の南側を縁取る外縁隆起帯を形成したと思われる嶺岡構造帯を構成する代表的な岩石（蛇紋岩，層状石灰質チャート，枕状溶岩）を嶺岡山地周辺で観察した．その後，東海岸を北上し勝浦海中公園に移動．午後は，まず吉尾漁港東方の海蝕崖に露出する清澄層上部を観察．干潮時間に合わせての訪問であったが，潮の引きが十分でなかったために，黒滝不整合が清澄層上部を浸食しながら直接覆う黒滝不整合を正面からみられる先端のボラの鼻には行けなかった．そのため，その様子を防波堤の先端からの遠望で確認した（写真９）．また，黒滝不整合を覆う上総層群最下部の黒滝層の特徴的な堆積物は海蝕崖の下に散在する転石で観察した．黒滝不整合直下のタービダイト砂岩優勢互層には，房総中央部の三石山林道や七里川沿いで観察した特徴的な凝灰岩鍵層Ky26タフが挟在していることから，ここでは，黒滝不整合が清澄層上部まで浸食し，七里川沿いでルートマップづくりをしながら観察した清澄層最上部とその上位の安野層全体が浸食されていることが，凝灰岩鍵層との関係から確認できた（不整合下での浸食現象の確認）．このあと，西隣の磯に行き，ここの海蝕崖で，房総中央部の三石山林道や七里川で観察した清澄層中部の凝灰岩鍵層Ky21（Hk）タフを観察．房総半島中央部では，Hkタフやその下位の凝灰岩鍵層はタービダイト砂岩優勢互層中に挟まれていたが，ここでは泥岩優勢互層中に挟まれて存在すること（同時異相現象）を確認した．

これで本研修を終了したことから，勝浦海中公園のある浜辺で，恒例の修了証書と参加証明書（CPD40単位取得証明書）の手渡し式を行うともに，修了証書受領記念集合写真を撮影した（写真10）．その後，海中公園の駐車場で帰りの身支度をした後，午後２時半過ぎにJR外房線の勝浦駅で解散した．

本研修の後始末として，参加者のみなさんには，実施後毎回行っているアンケートへの協力をお願いした．また今回新たな試みとして，小櫃川上流七里川沿いで作成したルートマップデータを基にした七里川流域の地質図や断面図の図学的作成，これらのデータを基にした，東海岸の黒滝不整合下での大まかな浸食量の算出を宿題として出した．研修終了後に提出された宿題の１例を第11図と第12図に示す．

本研修実施にあたっては，担当理事の杉田律子氏を始めとする地質学会の関係者，産総研地質調査総合センターの関係者にお世話になった．また，東大千葉演習林の関係者にも間接的にお世話になった．ここにお礼を申し上げる．なお，地質学会HP上には，より多くの写真を使って実施報告を掲載しているので，是非こちらもご覧ください．

（徳橋秀一・細井　淳）

（上から）写真11　研修終了後宿題として提出された七里川周辺の地質図の一例．
写真12　研修終了後宿題として提出された七里川沿いの断面線A－Bの断面図の一例．

TOPIC

～2018年日本地質学会創立125周年を記念して～

トリビア学史　4
不思議に満ちた白野夏雲（1827-1899）

矢島道子（日本大学文理学部）

明治の初め，地質学を志した日本人の第１世代は，ほとんどが欧米から学んだ．榎本武揚のように明治以前に欧米に行って学んだ者や，明治になってからお雇い外国人のコワニエ，ライマン，ナウマンなどに習った者などである．地質学そのものが日本で生まれたのではなく，欧米で生まれた学問だから当たり前のことかもしれない．ところが，今回とりあげる白野夏雲（文政10年 - 明治32年）は欧米人に習った形跡も，大学で教育を受けた経験もない．にもかかわらず，白野の地質学的業績はかなり秀でている．すでに佐藤（1983），白野仁（1984），中村（1986）も，白野の不思議さを指摘しているが，この稿で確認したい．また，白野の業績がすべて明らかにはなっているわけではないから，もっと素晴らしい業績も発見されるかもしれない．特に北海道や鹿児島から白野の業績は発見される可能性が高い．

白野夏雲（しらの　かうん）の経歴の不思議

白野の地質学的業績の再検討の前に，彼の人生自身が，名前，住所，職業等で不思議に満ちているので，少し検討する．白野は幕末に幕府直轄の甲州で生まれ，江戸に出てきたのち，41歳で明治維新を経験する．降伏して，江戸から静岡に回される．明治３年（44歳）十勝国が静岡藩の領地だったため，静岡から北海道に回され，そののち明治５年に開拓使に採用される．明治８年には内務省に採用され東京の地理寮に勤務する．ところが明治12年鹿児島県に出向となる．明治17年11月に農務省に帰ってきて，地質調査所勤務になる．それもつかの間，明治19年７月北海道庁勤務となる．北海道庁勤務のまま，明治23年，62歳で札幌神社（現在の北海道神宮）の宮司となる．明治25年北海道庁を依願免職し，亡くなるまで札幌神社宮司であった．

名前

本名は今泉耕作．嘉永4年，23歳で江戸に出るにあたって，出生地白野村に基づいて白野耕作と改名．明治３年，北海道に行くにあたって，白野夏雲ともう１度改名．この時代，木戸孝允などに見られるように改名はよく行われたようだ．

住所

生まれたのは甲斐国白野村（現在の山梨県大月市笹子町）．父は左官で石和代官の手代だったため，幼くして石和に転居．甲府徽典館（官学）で学ぶうちに江戸から派遣された学頭，岩瀬忠震（いわせただなり）の勧めに従い，江戸に出る．江戸では，幕府・歩兵の輜重隊の頭と軍事顧問を命ぜられ小川町に駐屯していた．元治元年39歳の時に天狗党の乱が起き，日光の警備を命じられ任地に赴く．慶應4年に彰義隊が上野に立てこもった時は浅草の蔵を守っていたが，官軍が江戸に入り徳川の残党を追求するに至って，隊を率いて新宿口から甲州へと逃げることができた．その後，前橋まで逃れ，降伏．江戸から静岡に回される．ここまでは幕末に幕府直轄地に生まれた人間の普通の道である．それでも，山梨の大月から，石和，江戸の後，日光，前橋と転々とした．

本格的に明治時代が始まると，開拓使，内務省，鹿児島県，農務省，北海道庁と任命者が変わって明治政府のために働く．短い東京勤務を挟んで，勤務地は北海道と鹿児島の間を行き来する．北海道内もよく歩いているし，東京での地理寮勤務の間にも地方の調査によく赴いている．鹿児島では琉球列島もよく調査している．地質学の研究者としてみれば，たいへんよく歩いているといえる．

岩瀬忠震と永井玄蕃

写真　神官，白野夏雲（白野　仁，1984）より．

白野の学んだ甲府徽典館学頭の岩瀬忠震（文政元（1818）－文久元（1861））は，江戸末の優秀な幕臣，外交官であった．石和から江戸に戻り，学頭としての功績が認められ，昌平坂学問所の教授となる．講武所・蕃書調所・長崎海軍伝習所の開設や軍艦，品川の砲台の築造に尽力した．その後も外国奉行にまで出世し，列強との折衝に尽力し，安政２年（1855年）に日露和親条約締結に臨み，安政５年（1858年）には日米修好通商条約に井上清直と共に署名した．水野忠徳，小栗忠順と共に「幕末三俊」と顕彰された．

ところが，13代将軍の将軍継嗣問題で徳川慶喜を支持する一橋派に属したので，大老となった井伊直弼による安政の大獄で左遷された．安政６年（1859年）には蟄居を命じられ，文久元年（1861年），44歳で失意のうちに病死した．

岩瀬の学問的業績，あるいは地質学的知について詳しく調べてないが，外国語にも秀でていたことは確かである．松岡（1981）に岩瀬から橋本佐内あての手紙の写真を見ることができるが，宛名はSanai様，差出人はHigoとなっており，横文字を日常使用していたことがわかる．白野は岩瀬に多くを学んだはずだ．明治16年（1883年）白野は岩瀬を偲んで東向島の白鬚神社に「岩瀬鴎所君之墓碑」を建立している．

白野仁（1984）は永井玄蕃（1816－1891）の影響も多大であると述べている．永井もまた甲府徽典館学頭から始まって，岩瀬と共に生き，安政の大獄を生き延びた後，榎本武揚とともに，函館戦争を戦った．その後，明治５年より開拓使勤務（東京）となり，白野の開拓使勤務(札幌)と同時期であった．

職業等

開拓使勤務は，上記のように，永井玄蕃の影響があると思われる．その後の内務省，鹿児島県，農務省，北海道庁，そして札幌神宮の動きの原因は不明である．

地質学的研究

地理寮と地質調査所に勤務したのは明治８年から12年と17年から19年の２度，全部で６年に満たないが，その他の職業についていても，随所で地質学的研究を行っている．

まず北海道では明治５年５月の墺国博覧会ニ付北海道物産取り調べ方を申し付けられる．この時彼は，北海道で，明治６年のウィーン万国博覧会用の標本を集めた．岩石・鉱物の相当な知識があったと思われる．北海道には１年半いて物産地質の調査にあたり，この時アイヌ語の研究にも着手したと思われる．

地理寮時代は，山梨県，静岡県，浜松県，愛知県，足柄県，千葉県，高知県，新潟県などで土石調査を行った．山梨，静岡などは白野にとってのゆかりの深い場所である．明治10年１月には内務省山林課に転じ地理局に勤め，明治11年には内国勧業

博覧会の委員と審査官を命ぜられている．やはり，岩石・鉱物に知識があり，「当時の地質調査所の展示室は夏雲の集めた標本がほとんどだった」（佐藤，1983）という記載もある．

明治15年８月刊行の「学芸志林」誌に発表した『穴居考』は地質学の論文である．タイトルから見ると，まるで古代の人間のすみかについて論じたもののようだが，内容は噴火作用，海水作用，露滴作用など，地球の作用について論じたものである．学芸志林は明治10年に創刊された，東京大学の紀要のようなもので，著者は多くが東京大学関係者だが，白野のように非東京大学人もいる．白野は明治13年，14年に『古代地名考』（明治13年の所属は静岡だが，明治14年には所属が記されていない）も書いている．明治16年にはやはり非東京大学人の坂市太郎が『地層褶起の説』を地学会会員の肩書で投稿している．

明治19年「地質要報」に『硯材誌』を旧局員［元地質調査所職員の意味］として投稿している．グレースレート，アロムスレートなどのカタカナことばが原綴を付して記されている．岩石に関する知識は豊富で正確である．「地質要報」の『硯材誌』の前に掲載されている論文はドクトルナウマンの粘板岩の報文であるが，それを参照せよとも書いてある．

白野が集めた岩石鉱物の類を息子（次男）の己巳郎がまとめて「金石小解」として出版している．明治12年版，明治15年版および明治17年版（夏雲が改訂）がある．白野が収集していた２～３千余の標本のうち，息子の己巳郎が鑑定し，典型的と思われるものを選んで，その説明をダナ氏のマニュアル・オブ・ミネラロジーから和訳してつけたとされている．

中村（1986）は明治15年刊行の『以太也蚶録』を日本の海底地質論の嚆矢として高く評価している．白野の研究業績は，海洋学，水産学等にもわたっていて，膨大である．あくまでも現場を歩いて，物にふれて，研究していたといえよう．白野について，丁寧な調査に基づいた的確な評価がなされることを望む．

文　献

松岡英夫，1981，『岩瀬忠震―日本を開国させた外交家』中公新書．

中村光一，1986，日本における海底地質研究の黎明２-１-白野夏雲『以太也蚶録』における海底地質論考．地質ニュース，no. 383，45－53.

佐藤博之，1983，先人を偲ぶ（1）．地質ニュース，no. 346，52－63.

佐藤博之，1985，博覧会と地質調査所-百年史の一こま（2）．地質ニュース，no. 372，17-28.

白野 仁，1984，『白野夏雲』北海道出版企画センター．

著者不詳，1896，雑報－白野夏雲翁，地学雑，８巻，96号，609.

地層名検索データベースの紹介
https://gbank.gsj.jp/strata/

はじめに

地層名検索データベースは，地層・岩体などの名称及びその定義，岩相などの情報に関するデータベースです．過去に提唱・記載された地層名，火成岩名，変成岩名など，たくさんの地層・岩体の名称とそれに関連する情報を蓄積し，インターネット上で公開しています（URLは標記）．このデータベースに採録されているデータは「地層命名の指針」（日本地質学会，2000）に則って提唱・記載された層序単元（地層名等）です．このような層序単元は地層を区分するための地質標準と言えますが，それらの情報にきちんとアクセスできるようにすることが本データベースの目的です．「地層命名の指針」に基づけば，新たな層序単元を提唱するとき，過去に使われた地層名は避けなければなりません．また地層名の数が多いために，専門家にも知られていない地層名が多数存在しています．これらの問題に対処するためにも，このデータベースは一般に広く情報を提供しています．

これまで地層名検索データベースは，火山や火成岩に関するいくつかのデータベースを含めた「地層･岩体･火山辞典」として紹介されました（厳谷ほか，2002など）．最近になってデータベーステーブルの内容が変更されて，新しく学術雑誌で記載された地層・岩体のデータが追加登録されました．この新しいデータガテゴリーについてご報告するのは初めてのことです．地層に関心のある方々にとって，いくらかでも参考になればと思いながら地層名検索データベースの内容について述べさせていただきます．

データベース誕生から今日に至るまでの経緯

15年以上前の1999年頃，当時の地質調査所地質部広域地質研究室の鹿野和彦氏（現鹿児島大学）を中心に地層に関するデータベース構築が立案され，2000年度から，産業技術総合研究所（以降，産総研）が1995年に開始した研究情報公開データベース（Research Information Database（RIO-DB））の一環として，鹿野氏を代表とする地層名検索データベースの構築が始まりました．2001年３月には10,000件を越えるデータを初めて一般公開しました．

RIO-DBサーバーでのデータベースシステムの運用は，10年以上の長きにわたって続きましたが，情報発信の枠組みが変わり，地層名検索データベースシステムの運用は産総研地質調査

図 地層名検索データベースの検索例．左上側の「検索の種類」中の「学会誌データベース検索」が新しく追加されました．

情報センター（現在は地質情報基盤センター）が担うこととなりました．2012年10月ごろからのシステム移行の期間を経て，2013年度からは新サーバーに更新データを保存して内容を公開しています．最近になり，日本地質学会をはじめとする地質関連学会で構成される層序単元登録審査委員会と連携して，学術雑誌から採録されたデータをこのデータベース上で新たに公開するようになりました．

データソース

データベースの採録にあたり，地層名データは日本地質学会（2000）の「地層命名の指針」に基づき「地名＋層序単元（層，層群，部層等）」という体裁をとる日本国内の地層を対象としています．データベースには地層名のほか，時代，文献，模式地などの項目を設け，それぞれの項目で検索できるようになっています（図）．

現在公開しているデータベースには，次の４種類の資料から採録されたデータが収められています．

１）共立出版から刊行された日本の地質「日本の地質（全９巻）」に記載された地層・岩体の名称のデータ，２）産業技術総合研究所，国土交通省北海道局（旧北海道開発庁）および北海道立地質研究所（旧北海道立地下資源調査所）発行による５万分の１地質図幅に記載された地層・岩体の名称のデータ，３）東京大学出版会から刊行された「地層名辞典」（日本地質学会編，1954，1955，1959，1962）に記載された地層・岩体の名称のデータ，４）学術雑誌で記載された地層・岩体の名称のデータ．

このうち以前から公開しているのは１）～３）です．１）では，1990年頃までに登録された代表的な地層名，３）では，1960年頃までに登録された新生代の地層名のデータが登録されています．また２）については，地質図幅の左右の凡例に記された地層・岩体の名称をもとに登録されており，同一の地層が岩相によって細分されている場合は細分された内容で登録されています．２）の登録は現在も行われていますが，現時点での登録件数は，およそ18,000件あります．

以上のデータに加えて，最近「学会誌データベース検索」として，新たに４）の学会誌で記載された地層・岩体の名称のデータの検索が可能になりました．これは日本地質学会をはじめとする地質関連学会の学会横断で構成される層序単元登録審査委員会が学術雑誌に記載された層序単元（地層名）の抽出を行った結果について公開するものです．現在公開されているデータは，現在から2010年までに地質学雑誌に記載された地層名をデータベースに登録したもので，今後さらに抽出・公開をすすめていきます．「学会誌データベース検索」の登録形式は，従来の形式に新たに掲載論文情報の項目を追加して，「掲載論文情報」の最後に，DOI（Degital Object Identifier）情報が追加されています．また掲載論文がGEOLISに登録されていれば「GEOLIS範囲情報」も追加されています．

おわりに

地層名検索データベースが公開されて10年以上になりますが，未登録の地層データはたくさんあります．データの登録作業は，膨大な資料から必要な情報を抽出しますので大変時間のかかるものですが，いったん地層名のデータがシステムに登録されれば，必要とする情報を，システム全体よりすばやく探し出すことができます．人がこれと同じことを行うのはかなりの労力ですから，地層の情報を活用する上でのデータベースの利用は欠かせないものです．

最近追加された「学会誌データベース検索」の対象とする内容は，これまでの地層名検索データベースに全く不足していたものです．「学会誌データベース検索」のデータがデータベースに蓄積されるほど，より地層名の重複を防ぐことが可能になりますし，登録データの質や信頼性を高めることが可能となります．

皆様のお役にたてるように使いやすい形，信頼できる形にして情報をお届けしたいと思います．とくにデータ内容につきましては，しっかりした内容のデータ登録を心掛けたく，登録されていない地層名や間違いなどお気づきの点があれはご教示ください．

地層名検索データベースは，ユーザー登録は不要で，インターネットを通じて誰でも地層の情報を無償で利用していただけます．地質学雑誌等で地層名を新たに提唱される方，また学術雑誌の編集に係わる方，地層について調べる方，地層に興味のある方，まだデータベースを使ったことのない方など，是非ご利用をおすすめします．

（産業技術総合研究所　地層名検索DB担当　**巌谷敏光**）

文献

日本地質学会，2000,日本地質学会地層命名の指針．（http://www.geosociety.jp/name/content0003.html）

巌谷敏光・鹿野和彦・中野　俊・尾崎正紀，2002，地層名検索データベースの構築．日本地質学会第109年学術大会（新潟）講演要旨，322–322.

日本地質学会編，1954，1955，1959，1962,「地層名辞典」新生界の部．東京大学出版会，1867p.

Islands Arcは，2016年より隔月出版となりました．最新号のVol. 26 Issue 1が2017年1月に発行されました．学会ホームページから会員ログインすると全文がオンラインで無料閲覧できます．是非ご覧下さい．

（Island Arc編集委員会）

Vol. 26 Issue 1（January）

［Research Article］

1. Diverse protolith ages for the Mindoro and Romblon Metamorphics (Philippines): Evidence from single zircon U–Pb dating

Ulrich Knittel, Monika Walia, Shigeyuki Suzuki, Carla B. Dimalanta, Rodolfo Tamayo, Tsanyao F. Yang and Graciano P. Yumul Jr.

砕屑性ジルコンU-Pb年代測定より得られたミンドロ・ロンブロン変成岩類（フィリピン）の多様な源岩年代

Ulrich Knittell, Monika Walia, 鈴木茂之, Carla B. Dimalanta, Rodolfo Tamayo, Tsanyao F. Yang, Graciano P. Yumul Jr.

フィリピン諸島南西部のパラワン大陸性地帯はアジア大陸の一部が分離し移動してきたものである．この地帯北東部に広く分布するミンドロ・ロンブロン変成岩類の源岩U-Pb年代を検討した．測定にはLA-ICP-MSを用い，砕屑性ジルコンの年代値を分析した．堆積性変成岩の源岩年代は含まれる砕屑性ジルコン年代値より若い．最近後期石炭紀から後期ペルム紀を示す源岩年代が報告されたが，今回の測定で各試料のもっとも若い年代データ群は，ミンドロ島では22～56 Maの範囲の値，タブラス島では112 Maあたりの値を得た．ミンドロ島北東部では後期石炭紀から後期ペルム紀，同島北西部では始新世またはそれ以新，同島中央部の変成岩類分布域南縁部では中新世，タブラス島では白亜紀またはそれ以新と場所によって源岩年代が異なる．一方ミンドロ島には非変成の後期始新統ラサラ層が分布する．以上のことからミンドロ・ロンブロン変成岩類は，パラワン大陸性地帯とフィリピン変動帯が中新世後期に衝突した際に変成したものなど，いくつかの源岩時代が異なるユニットからなることが判明した．

Key Words：ミンドロ変成岩類，パラワン大陸性地帯，U-Pb年代測定，砕屑性ジルコン

2. First record of microsporophyll genus Caytonanthus Thomas from Early Cretaceous beds of South Rewa Gondwana Basin, India: Its evolutionary and palaeogeographical significance

Prakash Neeru and Das Neelam

インドにおけるゴンドワナ盆・南レワ地区の上部白亜系からの小胞子葉属カイトナンサスの初産出とその進化学的および古生物地理学的重要性

シダ種子類は絶滅した植物タクサで，多様化が進んでいた．それらは古生代においては支配的な植物であった．中生代の植生においても重要な構成要素であったが，白亜紀になると被子植物の放散に伴って世界的に衰退していった．中生代のシダ種子類・カイトニア目の生存期間は後期三畳紀から後期白亜紀までの約1億年間に及ぶ．それらは支配的な要素になることはなかったが，産出が希であることから古植物学的には重要であり，注目すべきものである．カイトニア目はトーマスが1925年に設定し，三つのオーガン（器官）属すなわちカイトニア属（大胞子葉），カイトナンサス属（小胞子葉），サゲノプテリス属（葉）を含めた．本論文はインド半島のゴンドワナ堆積盆地の南レワ地区の下部白亜系から初めての産出となる小胞子葉属・カイトナンサスを記載している．その形態的特徴と古地理分布に関して，祖先グループも含めて南方起源である可能性を議論する．

Key Words：シダ種子類，カイトニア目，花粉器官，古地理，前期白亜紀，南レワ，ゴンドワナ，インド

3. The Aptian–Cenomanian flora of the Razdolnaya coal Basin (Primorye region, Russia)

Elena Volynts and Eugenia Bugdaeva

ロシア沿海州ラゾルナヤ石炭盆地のアプチアン期－セノマニアン期の植物相

沿海州のラゾルナヤ石炭盆地におけるアプチアン期－セノマニアン期の植物相の研究結果を報告する．本報告では，この堆積盆地における白亜紀植物相の分類群構成の検討と植物化石を含む堆積物の地質概略の記載を行った．Lipovtsy層（後期Lipovtsy植物群）の上部から被子植物の*Dicotylopyllum sp.*と類縁関係が決定されないプラタナス型植物化石が発見された．Lipovtsy層の年代はアプチアン期－前期アルビアン期と判断され，Korkino層群を構成する堆積物の古植物学的な特徴が初めて明らかとなった．

Key Words：植物化石，植物群集，アプチアン期，アルビアン期，セノマニアン期，ラゾルナヤ石炭盆地，沿海州

4. Depositional environments and maturity evaluated by biomarker analyses of sediments deposited across the Cenomanian–Turonian boundary in the Yezo Group, Tomamae area, Hokkaido, Japan

Takuto Ando, Ken Sawada, Hideto Nakamura, Keita Omatsu, Reishi Takashima, Hiroshi Nishi

北海道苫前地域に分布する蝦夷層群のCenomanian-Turonian境界相当層準のバイオマーカー分析による熟成度および堆積環境の評価

安藤卓人，沢田　健，中村英人，尾松圭太，高嶋礼詩，西　弘嗣

北海道苫前地域の朱鞠内川と大曲沢における蝦夷層群佐久層中のCenomanian-Turonian 境界（CTB）相当層準のバイオマーカー分析を行ない，有機物の熟成度と堆積環境を評価した．苫前地域の堆積岩の熟成度は，大夕張地域白金川のCTB層準試料より低く，ββホパン熟成度指標では朱鞠内川試料が特に未熟成な値を示した．プリスタン/フィタン比による堆積場の酸化還元環境の評価では，朱鞠内川試料でより還元的，大曲沢試料でより酸化的な結果が得られた．また別の酸化還元指標であるホモホペン比では，朱鞠内川の海洋無酸素事変（OAE）2前後の層準で還元的な値を示し，OAE2相当層準では朱鞠内川試

料，大曲沢試料ともに酸化的な値であった．CTB前後の苦前地域の酸化還元環境の変化は，古大西洋やテチス海で起きたとされる無酸素化との関連より，陸源有機物の流入などの地域的な要因で説明できる．しかし，ホモホペン比でみられるOAE期直後の無酸素環境は北西太平洋に特有なより広範なイベントを示唆する可能性がある．

Key Words：蝦夷層群，バイオマーカー，Cenomanian-Turonian境界，堆積環境，熟成度

5. Ichthyofauna (Chondrichthyes, Osteichthyes) from the Upper Cretaceous intertrappean beds of Piplanarayanwar, Chhindwara District, Madhya Pradesh, India

Ranjit S. Lourembram, Guntupalli V. R. Prasad and Pooja Grover

インドのマディヤ・プラデーシュ州チンドワラ地域パイプラナラヤンワーの上部白亜系デカントラップ挟在層からの魚類相（硬骨魚綱，軟骨魚亜綱）

インド中央部チンドワラ地域のモーガオンカランとジルミリのデカントラップ挟在層よりも92 km南方で，化石を多産する挟在層が新たに見いだされた．堆積物の篩別洗浄法によって，魚類，両生類，ワニ類，ヘビ類，恐竜類で代表される多様な小型脊椎動物化石群が採集された．本論では*Igdabatis indicus* Prasad and Cappetta 1993, *Lepisosteus indicus* Woodward 1908, Osteoglossidae gen. et sp. indet., Pycnodontidae gen. et sp. indet., Siluriformes indet. からなる魚類相を記載する．*Igdabatis indicus*の歯が多産する魚類相は，このデカントラップ挟在層の堆積環境が沿岸，三角洲，もしくはエスチュアリーで，時代が後期白亜紀（マーストリヒチアン期）であることを示唆する．この動物群と，アジファバードの動物群やマレパリのデカントラップ挟在層における動物群との顕著な類似は，後期白亜紀のゴーダーヴァリ地溝帯に沿って海岸平野が続いていたことを示唆する．デカン火山岩地域マンドラ舌状体のジルミリにおけるデカントラップ挟在層に浮遊性有孔虫が存在することから，前期暁新世のナルマダ・リニアメント沿いの西岸から短期的に海が侵入したことが推測されるが，現在のところ，少なくとも最末期白亜紀にナルマダ・リニアメントに沿って海域もしくは海岸平野が広がっていた決定的な証拠はない．

Key Words：デカントラップ，デカントラップ挟在層，魚類動物相，パイプラナラヤンワー，後期白亜紀，古生物地理

支部コーナー

☆西日本支部　案内

平成28年度総会・第168回例会の案内

日時：平成29年２月18日（土）9:30 ～ 例会終了後　懇親会
　例会プログラムの詳細は講演確定後にお知らせします．
会場：宮崎大学（木花キャンパス）教育学部講義棟４階
　懇親会会場は宮崎市内中心部のホテルメリージュ（宮崎市橘通東３丁目１－11）
・木花キャンパスまでの交通案内は下記 URLを参照のこと．
　https://www.miyazaki-u.ac.jp/guide/map/kibana
　バスの時刻表：http://www.miyakoh.co.jp/bus/rosen/
　車でお越しの場合は教育学部北側駐車場または東側駐車場をご利用ください．
・例会参加費：一般　1,000円/人，学生　500円/人
・懇親会参加費：一般　4,500円/人，学生　2,500円/人

講演申込
・発表は口頭またはポスター形式の何れかを選択．
・口頭発表は15分，ポスターサイズは横幅110cm以下，縦140cm以下．
・優秀な発表を行った学生のための「優秀発表賞」を設けています．
・講演要旨原稿は地質学会年会のフォーマットと同じ形式とし，PDFファイル（フォント埋め込み）とWord形式ファイルの両方を支部事務局までe-mailにてお送り下さい．
・申込の際には下記の情報をあわせてお知らせ下さい．
１）連絡先（発表者氏名・所属・e-mail・電話）
２）発表様式（口頭・ポスター・どちらでも可，のいずれか）
３）学生か否か
４）懇親会の参加・不参加
講演申込み締切：２月３日（金）17時

CPD単位証明書の発行
　西日本支部では，地質技術者への継続教育の一環として大会参加者・発表者へCPD単位を発行します．大会参加と口頭／ポスター発表の「受講証明書」は，当日15時以降に会場受付にてお渡しします．
・ポスター発表：１×ポスター制作時間（h）（＊上限15単位）
・口頭発表：３×発表時間（h）（例：20分の場合：３×１/３（h）＝１単位）
・参加：１×滞在時間

委任状
　総会にご出席いただけない方は下記様式の委任状を支部事務局へお送り下さい．
==========　委任状　==========

日本地質学会西日本支部平成28年度総会・第168回例会における議決権を，
　　様に委任いたします．

平成29年　　月　　日
御氏名：
==========
問い合わせ，および講演要旨原稿送付先
西日本支部事務局：〒739-8526　東広島市鏡山１-３-１　広島大学大学院理学研究科　地球惑星システム学教室　早坂康隆（tel：082-424-7462，e-mail：hayasaka@hiroshima-u.ac.jp）

支部コーナー

☆北海道支部　報告

出版記念シンポジウム「北海道自然探検　ジオ（大地）の魅力がいっぱい！」

「北海道自然探検　ジオサイト107の旅」が，2016年５月に出版されたことを受け，昨年12月に表記シンポジウムが開かれました．

竹下　徹・日本地質学会北海道支部長は挨拶で次のように述べました．

支部の役割の一つに地質学の普及があり，特に若い人たちに地質の魅力を伝えることが大事です．欧米に比べると日本では，地球科学が一般の人たちになじみがないように思います．2011年３月11日の東北地方太平洋沖地震以来，地質学の応用面での貢献が求められています．

北海道大学の川村信人氏が「北海道地質百選・ジオサイトの旅と私」と題して講演しました．川村氏は，この本で37のジオサイトについて執筆しています．その中で，川村氏にとっては，乙部町の館ノ岬と釧路市の春採太郎が印象的なジオサイトだそうです．また，地質標本や露頭などを含めた地質記録リポジトリーが必要ではないかという問題提起をされました．

そのあと，編集に携わった石井，田近，鬼頭がそれぞれ発表を行いました．

さらに，日高山脈博物館の東 豊土氏は，博物館で行っている様々な普及活動を紹介されました．日高町には，ヒスイ鉱山の沢や岩内岳かんらん岩など魅力的なジオサイトが沢山あります．子供たちとその親を対象とすることで普及活動に拡がりをもたせるようにしています．

北海道立総合研究機構・地質研究所の廣瀬 亘氏は，世界ジオパークネットワークがユネスコの正式事業となり，国際誌への論文投稿が必要になるなど担当者の負担が増大している現状について話されました．

北海道立総合研究機構・地質研究所の鈴木隆広氏は，自然景観データベースを紹介されました．具体的には豊平川沿いのジオサイトをタブレットで案内するシステムを構築しています．さらに，地質研究所では，「ジオサイト写真提供のページ」（ホーム ＞ 出版・刊行物 ＞ 図面・データ・カタログなど ＞ ジオサイト写真の提供ページ ）を設けています．
https://www.hro.or.jp/list/environmental/research/gsh/publication/data/geosite_photo_dl/index.html

北海道には，この本に掲載された以外にも多くの魅力的なジオサイトがあります．私たちは，北海道地質百選のウェブサイトを充実させる活動をもう少し，続けます．

皆さまのご協力をお願い致します．

（北海道地質百選検討グループ　文責：**石井正之**）

院生コーナー

2016 Iran-Japan Joint International Workshop on Isotope Geologyに参加して

若杉勇輝
関西学院大学大学院理工学研究科
化学専攻博士課程後期課程１年

2016年10月１日～２日にかけてイラン西部サナンダジュのクルディスタン大学で『2016 Iran-Japan Joint International Workshop on Isotope Geology』が開催されました．本シンポジウムは日本とイランの同位体地質学の分野における国際学術交流を目的として企画され，開催されるのは今回が記念すべき第１回目です．本稿では，シンポジウムおよび後日行われた巡検について報告します．

写真１　筆者の口頭発表風景．

シンポジウム

本シンポジウムは，クルディスタン大学のHossein Azizi先生と名古屋大学の淺原良浩先生が中心となり企画されました．Hossein先生は以前から名古屋大学の淺原先生，関西学院大学の壷井基裕先生とイラン北西部サナンダジュ－シールジャン帯に産する火成岩類に関する同位体地球化学的（U-Pb系，Rb-Sr

写真２　タカーブでの巡検風景．トラバーチンで形成された丘を登る．
写真３　巡検終了後の集合写真．

系，Sm-Nd系）研究を共同で行ってきました．これまでの研究の総括を行うと共にイランと日本の研究者間での繋がりをより密接にすることが本シンポジウムの目的です．参加者は40～50名ほどで，日本から学生として筆者と名古屋大学大学院環境学研究科の眞野航大さんの２名が参加し，また名古屋大学大学院環境学研究科の田中剛先生，淺原先生，関西学院大学理工学部の壷井先生が参加しました．イランからの参加者は各地から集まった研究者とクルディスタン大学の学生でした．クルディスタン大学はイラン最西部クルディスタン州随一の総合大学で，Hossein先生が所属する工学部をはじめ理学部，天然資源学部，農学部などがあります．シンポジウムは２日間に渡って開催され，初日は８時から18時まで口頭発表が行われ，２日目は８時から16時まで口頭発表，16時から18時までポスター発表が行われました．口頭発表では同位体地球化学の基礎からアプリケーションまで幅広い発表が行われ，同位体分析について初めて学ぶ学生やこれから同位体分析を始めようとしている研究者にも参考になる内容でした．

淺原先生はRb-SrやSm-Ndなどの放射壊変系に関して発表されました．発表では岩石試料に対する化学処理に関するレクチャーもあり，酸分解などの前処理における注意点や分析値への影響が紹介されました．私も前処理過程でのコンタミネーションの防止や分析値に対する評価の重要性を改めて実感しました．イランの方々も講演後，淺原先生に対して熱心に質問や相談などをしていました．田中先生は希土類元素の地球化学と河川堆積物の地球化学図に関して発表されました．また，壷井先生は花崗岩体内におけるSr同位体初生値不均質に関する発表とCHIME年代測定法に関して研究例を交えて解説されました．Hossein先生はレーザーアブレーション誘導結合プラズマ質量分析計（LA-ICP-MS）を用いたジルコンのU-Pb年代測定に関する発表をされました．実際の測定の様子を撮影した動画を用いて解説されていたので，装置を使用したことがない学生や研究者でも内容を理解することができたと思います．これらの講演を通して，今まで以上に同位体分析について理解を深められました．

筆者は現在研究している火成岩のSr安定同位体組成（δ^{88}Sr）に関する研究報告を行いました（写真１）．今回の発表では安定同位体地球化学の基礎から紹介しました．これまでは放射壊変起源のSr同位体比（^{87}Sr/^{86}Sr）に関する研究が主でしたが，筆者はSrの安定同位体比（^{88}Sr/^{86}Sr）に着目して研究しています．火成岩の中でもSr安定同位体組成（δ^{88}Sr）がより顕著に変動した岩体を中心に調査研究を行っています．発表内で一例として，福島県南西部に分布する只見川古期花崗岩類におけるSr安定同位体組成（δ^{88}Sr）の挙動を示しました．自分の発表を思い出すと，練習を重ねたこともあり発表に関しては問題なく進行できましたが，質疑応答などまだまだ改善すべき点も多々ありました．今回の口頭発表での反省点を今後に活かしていこうと思います．

ポスター発表ではイランの学生も多数発表を行っていました．ポスター発表で用いられている試料は私がサンプリングに同行したものも多く，それらの研究報告を直接聞くことができ，非常に有意義な時間でした．それ以外にも，クルディスタン大学の方々と意見交換や交流を行うことができました．

巡検

シンポジウムの翌日からはHossein先生の案内でイラン西部の巡検を行いました．巡検は２日間行われ，初日はザンジャン，２日目はタカーブへ行きました．移動にはマイクロバスを使い，Hossein先生の学生数名を含めて15名ほどで露頭を回りました．ザンジャン，タカーブはともにサナンダジュから車で片道５時間半かかるため，露頭で観察できる時間が少なくなってしまったことが残念でした．ザンジャン周辺にはIOA（iron oxide apatite，磁鉄鉱－リン灰石）鉱床が分布していて，これらの鉱石中には数cm大のアパタイト巨晶が多数みられました．

タカーブでは世界遺産のタフテ・ソレイマーンへ行き，周辺に分布するトラバーチンを観察しました．温泉が湧き出している場所やトラバーチンで形成された高さ約110 m，幅約65 mの丘の中央に深さ約80 mの大きな縦穴がある地形も観察することができました（写真２，３）．頂上から縦穴を覗くと硫化水素臭がし，落ちそうで怖かったです．

巡検中の食事はナンとケバブと野菜などをサンドイッチにして食べることが主でした．いつでも紅茶を飲めるように車内にやかんと茶葉を常備しているらしく昼食後や巡検終了後には皆で紅茶を飲みました．イランの紅茶の飲み方は独特で，砂糖はカップに入れずに角砂糖を口に含んで徐々に溶かしながら飲んでいました．また，スイカやメロンなどのフルーツは日本のように高価ではないらしく頻繁に食べることができました．

まとめ

今回のシンポジウムおよび巡検では，イランの学生との交流を通してイランの風土，言語，地質など数多くのことを知ることができました．今後もイランと日本の地質学分野を通した学生同士の交流が続いていけばと思います．最後に，今回シンポジウムおよび巡検を企画運営して頂いたHossein先生をはじめとしたクルディスタン大学の方々に深く感謝申し上げます．

常時投稿をお待ちしています．院生コーナーの編集は現在以下の４名で行っています．原稿は5000字以内，図・写真３点以内を目安に，e- mailでいただければ幸いです．

kouzu_0419@geol.tsukuba.ac.jp　高津翔平（筑波大）
16nd204l@vc.ibarkai.ac.jp　羽田裕貴（茨城大）
k0231215@kadai.jp　山下大輔（熊本大）
yamada-masataka1@ed.tmu.ac.jp　山田眞嵩（首都大）

学　会　記　事

一般社団法人日本地質学会の議事録を掲載しています.

日本地質学会2016年度
第２回理事会議事録

日時：2016年９月９日（金）　13:30 ～ 16:00
会場：北とぴあ　901会議室
出席役員：理事（34名）：天野一男　安藤寿男　大藤　茂　緒方信一　笠間友博　狩野彰宏　川端清司　川辺文久　小宮 剛　沢田 健　斎藤　眞　佐々木和彦　坂口有人　澤口　隆　菖蒲幸男　杉田律子　竹下　徹　田村嘉之　辻森　樹　内藤一樹　中澤　努　仲谷英夫　西　弘嗣　楡井　久　廣木義久　星　博幸　保柳康一　松田達生　松田博貴　向山　栄　矢島道子　山田泰広　山本高司　渡部芳夫　監事（１名）：山本正司
欠席役員：理事（11名）：有馬　眞　井龍康文　市川八州夫　岡田　誠　亀尾浩司　清川昌一　田村芳彦　奈良正和　平田大二　福冨幹男　三田村宗樹　監事（１名）：藤本光一郎
その他出席者：橋辺菊恵（事務局）
＊成立要件：理事総数45名の過半数23名　本日の出席者34名で本理事会は成立.
＊議決：出席者の過半数18名
＊書記２名の選出：内藤，中澤

報告事項

１．執行理事会報告（斎藤常務理事）
第１～３回の執行理事会議事録の要点が説明された.
前回理事会以降の逝去会員の氏名が報告され，黙祷をささげた.

２．理事及び委員会等報告
１）国際地学オリンピック三重大会報告（地学オリンピック日本委員会久田理事長）
日本勢は金メダル３つ，銀メダル１つを受賞した．選手以外のオブザーバも良い成績を残した．大会開催には三重県内の高校にもご協力いただき，和やかなムードをつくってくださった．開会式には当学会副会長が参加した．今大会では選手と引率・運営者の宿泊所を完全分離することで円滑な大会運営ができたほか，日本の防災教育，科学教育基盤を強くアピールすることができた．後日文部科学大臣を表敬訪問する．今回の地学オリンピック開催については新聞等に150以上の記事が掲載された.
２）行事委員会（代斎藤理事）
東京・桜上水大会では，市民講演会，国際シンポジウム，一般公開シンポジウム，アウトリーチ関連セッション等を開催する．一般講演の発表件数は昨年よりやや減少．巡検は最小催行人数に達しなかったため２つのコースをキャンセルしたが，いくつかは移動手段をレンタカーに切り替えることにより実施することにした．レンタカー使用マニュアルを作成して遵守を義務付け，定時連絡を実施することにより安全確認を徹底することとした．また，これまでの大会の巡検参加状況をもとに，来年度の巡検の設定を再検討することとした.
来年（2017年）の愛媛大会は9月16-18日に愛媛大学で開催予定．2018年は北海道大学で開催予定.
３）地質学雑誌編集委員会（中澤理事）
巡検案内書は来年度以降も地質学雑誌の通常号に掲載すること，学会賞及び小澤儀明賞，柵山雅則賞受賞者には受賞テーマに関連したレビュー論文の執筆を依頼すること，トムソン・ロイターの文献データベースEmerging Sources Citation Index（ESCI）に地質学雑誌の登録申請をすることについて報告があった.
４）防災学術連携体の活動について（斎藤理事）
日本学術会議・防災学術連携体での活動の一環として，8/27に東京大学で開催された防災推進国民大会において，学会企画として地質地盤情報の講演会を開催した．また防災学術連携体が企画した火山災害関係の講演会では，当学会火山部会から及川会員に火山地質について紹介していただいた．このほか防災学術連携体では現在，風水害関係のセミナーの開催が検討されているが，このセミナーにも学会として斜面災害の観点から関わっていきたい.
５）創立125周年に向けての学会コミュニケについて（渡部会長）
来年の年頭挨拶に創立125周年に向けた学会コミュニケを入れる．現在，学会の解決したい現状とその解決手段について項目ごとにとりまとめている．まだ未検討の項目もあるが，執行理事会を中心に検討をすすめ，12月までに全体をとりまとめる．理事会からの意見を募る.
６）125周年記念事業実行委員会（矢島理事）
記念事業の検討について報告があった．ジオルジュの125周年記念号や「社会と地質学」「県の石」に関する記念出版物を企画する．記念支部事業，記念式典・祝賀会を開催予定．記念ロゴはデザイナーによるリメイクの終了後にニュース誌で最終図案を紹介する予定．そのほか寄付，記念表彰，会員証，125周年広告を検討している.
７）県の石支援委員会（辻森理事）
山口県，鳥取県に会長及び関係理事が表敬訪問し，「県の石」の活用についてお願いをした．この模様は新聞各紙で報道された．また「県の石」について，学会ニュース誌にカラーで紹介記事を掲載したほか，英文リーフレットを作成しIGCで紹介した．現在，書籍出版企画を検討している．書籍では学術面の解説をしっかりやってほしい，「県の石」をジオパークに是非活用していただきたい，とのコメントがあった.
８）そのほか
・フィールドジオロジーシリーズの電子版が出版された．印刷版と値段は変わらないが，スマートフォン等でフィールドに持っていけるので是非学生に普及していただきたい（天野理事）.
・地方地質誌「東北地方」（朝倉書店）及び「海洋底科学の基礎」（共立出版）が間もなく出版される予定（安藤理事）.

審議事項

１．謝金に関する細則の検討（運営規則の変更）（緒方理事）
柔軟な講師謝金の設定を可能にするため，謝金に関する細則の適用を理事会が定める場合を除くことにするよう，細則の一部を改正することをはかった．全会一致で異議なく承認された.
２．各種委員会委員の変更,及び既存委員会の現状把握と整理（斎藤常務理事）
学会活動の明確化と活発化のため，委員会構成の確認をした．理事会規則第14条１項による委員会として，支部長連絡会，地質災害委員会，名誉会員推薦委員会，男女共同参画委員会，ジオパーク支援委員会，各賞選考委員会，理事会規則第14条２項による委員会として，地学オリンピック支援委員会，法務委員会の構成が提示され，委員の交代・継続が提案された．名誉会員推薦委員会については，委員の選出方法と次回理事会での決定が確認された．全会一致で異議なく承認された.
３．会員証の発行について（緒方理事）
125周年記念事業の一環として，学会員としての自覚を高め，学会外への証明，学会行事受付業務の簡素化のため会員証の作成が提案された．バーコードつきのプラスチックカード形式とし，2018年１月配布とすることが提案された．全会一致で異議なく承認された.

以上，この議事録が正確であることを証するため，議長及び出席監事・理事は次に記名・捺印する.

2016年９月21日
一般社団法人日本地質学会
理事会議長　向山　栄
（以下，理事氏名省略）

2016年度
第３回執行理事会議事録

日時：2016年９月９日（金）11:00～12:30
場所：地質学会事務局
出席者：渡部会長　山本副会長　松田副会長　齋藤常務理事　安藤　岡田　緒方　小宮　坂口　杉田　辻森　内藤　中澤　西　廣木　山田　（事務局）橋辺
欠席者（委任状提出あり）：田村　平田
＊定足数（12，委任状含む）に対し，出席者16名，委任状２名，合計18名の出席．
＊前回議事録を承認した．

審議事項

１．産総研地質調査総合センターより「地方におけるCPD単位認定講演会等への講師派遣に関するご提案」が正式にあった．
２．JIS原案作成委員会の委員の推薦について
　委員長候補の委員として，宮下元会長を推薦することとした．
３．東レ科学技術研究助成への応募１件の検討（10/７締切）
　菅沼悠介会員（極地研究所）より推薦応募があり，検討のうえ推薦することとした．
４．創立125周年に向けての学会コミュニケについて
　会長よりコミニュケ案が示された．
５．日本地質学会謝金細則の改正
　メール審議の後，今回確認して，理事会に上程することとした．
６．理事会議事進行
「2016年度第２回理事会議事次第」に沿って確認
７．その他
　来月以降の執行理事会開催予定．10月22日（土），11月19日（土）

報告事項

１．全体的報告
１）県の石について，山口県および鳥取県に会長が赴いて面談した．
　辻森理事より，「県の石」活動報告で概要紹介．
２．運営財政部会：総務委員会（緒方・西）
＜共催・後援依頼，他団体の募集等＞
　１．「2016土壌・地下水環境展」（10/19-21，土壌環境センター，日刊工業新聞主催）の協賛依頼について承諾した．
　２．第７回日本ジオパーク全国大会「日本ジオパーク伊豆半島大会」（10/10-12）の後援依頼を承諾した．
　３．山田科学財団「2016度研究援助候補者の推薦」案内（10/１-２/24）学会推薦は３件まで→News誌，HP，geo-flashに掲載
　４．福武財団「瀬戸内海文化研究・活動支援助成」の募集案内（９/１-９/30）→News誌，HP，geo-flashに掲載
＜その他＞
　１．地学団体研究会より，“・・原発ゼロ社会を目指す”，“・・軍学共同研究に反対する”の２件の声明を総会で採択したとの連絡があった．
＜会員＞
　１．今月の入会者（３名）
　　正会員〔２名〕：平野公平，寶代誠二郎
　　正（院割）会員〔１名〕：村松　樹
　２．今月の退会者　なし
　３．今月の逝去者（１名）
　　正会員（１名）：加藤萬太郎（2016/04/15）
　４．2016年５月末日会員数
　　賛助：27，名誉：57，正会員：3695（正会員：3525，正（院割）会員：162，正（学部割）会員：８）合計 3779（昨年比－84）
＜会計＞
・The Geology of Japanは８/10に入荷（360部），その日のうちに予約者に発送した．販売部数355部の収支は，収入2,318,000円，支出1,684,879円（代金，送料など）．GSLからの報告では売れ行きが好調で，おおよそ630部販売したとのこと．
・東京大会の経費について，会場の状況によるパネル枚数の増加とそれに伴う運送経費などで，経費の増加が見込まれている．
３．広報部会：広報委員会（坂口・小宮・内藤）
４．学術研究部会（岡田・山田）
１）行事委員会（岡田）
　・東京桜上水大会，愛媛大会，北海道大会について
　・東京大会巡検実施状況報告：予定コース11件のうち，催行９件，２件（G，H）が取り止めとなった．催行人数にわずかに下回ったコースでは，レンタカー使用で実施を可能とした．
　・レンタカー使用巡検について：今回は特例で認めたので，今後の対応が必要．今回は安全に実施するため，レンタカー使用実施マニュアル，巡検レンタカー運転チェックシートを作成することで，対応を行った．
　・レンタカー利用の巡検および催行人数に達しない場合の実施方法について，事故対応なども含め検討した．
　・2017年の愛媛大会では８件の巡検（案）がある．実施コース，催行の可能性，日程等の再検討も必要．愛媛大会のためにルールや方針の検討をし，年内に決定し，示す必要がある．
５．編集出版部会（中澤・田村・小宮）
１）地質学雑誌編集委員会（山路編集委員長，中澤担当）
　（1）編集状況報告（８月５日現在）．
　　2016年投稿論文　総数58編［総説３（和文３），論説31（和文31），報告４（和文３，英文１），講座５（和文５），ノート３（和文２，英文１），口絵１（和文１），巡検案内書11］
　　査読中：37　受理済み：12
　・122巻８月号：巡検案内書５編（計86ページ，発行済み，９/１発送）
　・122巻９月号：論説３，報告１，口絵１（計約55ページ，入稿中）
　・巡検案内書について，全11コース中10コース掲載．残りの１編については引用要件が整い次第受理・掲載の予定．
　・125周年記念特集号：「深海掘削計画（IODP）と深部掘削船「ちきゅう」10年の成果ⅠおよびⅡ」（世話人：西　弘嗣）投稿開始
　・Thomson Reuterとの打ち合わせ．Web of Scienceへの対応
　・Scopusへの対応　今後検討

２）アイランドアーク編集委員会（田村）
　（1）編集状況
　　Vol.25 Issue5（2016年９月）：特集号：Geological records of storms, tsunamis and other extreme events（世話人：藤野滋弘）６編まもなく発行予定．
　　Vol.25 Issue６（2016年11月）：IGCP608*1，坂口特集*2から各２編，一般原稿１編：計５編
*1 Land-Ocean Linkages and Biotic Evolution during the Cretaceous: Contribution from Asia and Western Pacific
*2 The mechanics and evolution of megathrusts within accretionary complexes
　（2）オンライン投稿の状況
　　過去半年（2016.2.1～2016.7.29）の投稿数46件．うち新規投稿41件．
　（3）その他
　・査読システムの新機能等の付加（論文査読者にcreditを授与するPublonsの導入，Reviewer Locator機能の付加）
　・校正原稿の重大な組版ミスが多発し，校正，編集作業に遅れが生じた．ワイリーで現在原因を調査中．Typesetterの業者変更も含めて検討中．
６．ジオパーク支援委員会（平田）
１）第17回地震火山こどもサマースクール in 南紀熊野
　・開催場所：南紀熊野ジオパーク
　・実行委員長：和歌山大学　此松教授
　・テーマ：「南紀熊野の海と山のヒミツ」
　・日時：平成28年８月20日（土），21日（日）
　・参加者：38名（小学生13名　中学生16名　高校生９名）
２）９/９，日本ジオパークネットワークの審査委員会が開催されている．
７．地学オリンピック支援委員会（平田）
１）国際地学オリンピック三重大会報告（坂口）
　理事会において，日本地学オリンピック委員会の久田理事長より，報告がある予定であるが，ざっと今大会の様子が報告された．

8．地質技術者教育委員会（山本）
夜間小集会で検討予定
9．125周年記念事業実行委員会（緒方，渡部）
会員証発行について，理事会に上程する．
10．県の石支援委員会（辻森）
・県の石の周知，広報，活用について山口県および鳥取県に続き，今後各県への働きかけを行っていく．
・公明新聞から紹介記事の依頼があり，井龍理事が対応．
・出版プロジェクトについて，現在，プランを検討中．
11．その他
1）子どもゆめ基金への応募について（岡田）
子ども向け地質学デジタル教材（タブレットで使用）の製作について，地質学会として，子供夢基金の助成を受けて，出版社　オリーブグリーン: http://www.olive-green.info/　から出版する，という提案があることが岡田理事から紹介された．
岡田，小宮担当理事であらかじめ検討のうえ，次回の執行理事会で検討することとした．
2）防災学術連携体総会報告（斉藤）
8/27に実施された防災国民大会等について報告された．

以上

2016年9月9日
一般社団法人日本地質学会執行理事会
会　長（代表理事）渡部芳夫
署名人　執行理事　斎藤　眞

2016年度
第4回執行理事会議事録

日時：2016年10月22日（土）13:00～18:00
場所：地質学会事務局
出席者：渡部会長　山本副会長　松田副会長　齋藤常務理事　安藤　小宮　坂口　杉田　内藤　西　廣木（事務局）橋辺
欠席者（委任状提出あり）：緒方（渡部）　岡田　田村　辻森（斎藤）　中澤　平田（渡部）　山田（欠席委任なし）
＊定足数（12，委任状含む）に対し，出席者12名，委任状5名，合計17名の出席．
＊前回議事録の承認

審議事項

1．創立125周年に向けての学会コミュニケ最終案の確認（渡部会長）
「地質の日」の活動を含めた支部活動の啓蒙や活発化を目指し，各支部支援も考慮する．
2．「調査研修実施要領」の策定について（杉田・緒方）
要領の内容について修正の上，次回の執行理事会で再検討
3．子ども向け地質学デジタル教材（タブレットで使用）の制作：子どもゆめ基金（国立青少年教育振興機構）への応募について（岡田・小宮）
平成29年度子どもゆめ基金助成金（教材開発・普及活動；電子申請締切11/7）について，申請書，協力社（オリーブ・グリーンの実績），Websiteによる事業詳細と採択実績等を考慮し，執行理事会としては本年度の申請（担当：小宮）を了解する．ただし，申請時期が迫っているので，提出までに理事会の承認は間にあわない．事後承諾となるが，次回の理事会で承認を得ることとする．
4．名誉会員推薦委員会委員候補者を予定し，11月の執行理事会で候補者の決定をして12月の理事会に諮る．委員長は山本副会長．執行理事会で候補者を立てる階層委員については，候補者を検討し，次回執行理事会までに内諾を得ることとする．職責委員（各支部長）については下記の通りである．
・職責委員（各支部長）7名（竹下　徹，柴正敏，有馬　眞，大藤　茂，三田村宗樹，石塚英男，仲谷英夫）
・階層委員：官公庁，小中高教員，会社，大学から各1名ずつ
・理事会推薦委員1名：次回理事会で決定
5．愛媛大会の8件の巡検（案）について，催行の可能性，日程，費用，交通等の再検討し，愛媛大会のためにルールや方針について早急に検討し，示す必要がある．行事委員会での至急の検討を依頼する．
6．12月理事会議案である，総会の日程について
日程は連合大会（5/20-25）期間中の20日か21日とし，会場はメッセも含めて，幕張付近の会議施設を検討する．

報告事項

1．全体的報告
1）県の石について，10/7に茨城県庁で会長が橋本知事と面談した．
橋本県知事からは県の石の展示方法等，要望があった．
現在，茨城県を含む4県への広報活動が進行している．
2）リーフレット「日本列島と地質環境の長期安定性」の資源エネ庁からの利用依頼について
印刷物の販売・ネット配信等についての検討状況の概要報告された．
3）国際地学オリンピック三重大会の実施報告書（会計報告）が送付された．
余剰金については今後の地学オリンピック委員会の運営活動に使用するとの報告があり，日本委員会として，寄付者に余剰金の使途を説明すべき，との意見を申し出ることとした．
2．運営財政部会：総務委員会（緒方・西）
＜共催・後援依頼，他団体の募集等＞
・第58回藤原賞（藤原科学財団）の募集，対象は自然科学で所属組織・機関の長の推薦が必要．応募締め切りは12/20，学会の締め切りは11/30とする．→geo-flash，HP，Newsに掲載
・ゼオライト学会よりの第32回ゼオライト研究発表会（12/1-2）の協賛依頼を承諾した．
・朝日新聞社主催の第14回高校生科学技術チャレンジ（JSEC2016）の後援依頼を承諾した．
・経済調査会よりの地質調査要領説明会（全地連主催）の後援を承諾した．
・東大大気海洋研究所共同利用並びに学際連携研究の公募案内（締切11/30）→geo-flash，HPに掲載．
＜その他＞
1）東北大学多元物質科学研究所（旧選鉱研）の設立記念式典への案内があり，井龍前会長に出席をお願いした．
＜会員＞
1．今月の入会者（4名）
正会員〔2名〕：鈴木正哉，山崎敏夫
正（院割）会員〔2名〕：関　笙，山田晃也
2．今月の退会者（正会員1名）吉田開祐
3．今月の逝去者（正会員1名）鈴木和博（2016/10/15）
4．2016年9月末日会員数
賛助：27，名誉：57，正会員：3711（正会員：3528，正（院割）会員：170，正（学部割）会員：13）合計 3795（昨年比－79）
＜会計＞
・東京桜上水大会の収支については，予算より収入がやや伸び，支出が抑えられたため黒字となる見込み．参加者，費用項目，業者の対応等簡単な報告．
3．広報部会：広報委員会（坂口・小宮・内藤）
1）フォトコンについて
・昨年同様に協賛および後援依頼を行い承諾を得た．協賛：ウィンデーネットワーク（株）（協賛金5万円），後援：JGN（後援金3万円），深田研ジオ鉄普及委（後援金各1万円）
・広報用ポスターを作成，10/24以降に発送予定．
2）ジオルジュ後期号の編集状況について，現在校正中であり予め会長が記事に目を通されたことが報告された．
4．学術研究部会（岡田・山田）
1）行事委員会（岡田）
・愛媛大会における情報展および市民講演会については，来年度の科研費応募のための準備中．
2）国際交流委員会（井龍）
・2024年37th IGC Pusan, Korea について，桜上水大会の際に大韓地質学会会長から巡検実施の協力要請があった．（渡部）
3）JIS，標準担当（中澤，代　内藤）

・層序単元のデータベース化の進捗と今後の方針について，中澤理事の資料を内藤理事が報告した．

4）その他

・日本学術会議　地理・地学教科書用語検討小委員会での作業進捗状報告

・JIS用語との連携も考慮する

5．編集出版部会（中澤・田村・小宮）

1）地質学雑誌編集委員会（山路編集委員長，中澤担当，代　斎藤）

（1）編集状況報告（10月20日現在）．

2016年投稿論文　総数79編［総説８（和文８），論説42（和文42），報告７（和文４，英文３），講座５（和文５），ノート３（和文２，英文１），口絵３（和文３），巡検案内書11］，査読中：43，受理済み：16編（うち特集号１）

・122巻10月号：論説３，講座１（計約52ページ，10/24校了，10/31発送予定）

・125周年記念特集号投稿状況（実際投稿数/予定論文数）

「深海掘削計画（IODP）と深部掘削船「ちきゅう」10年の成果IおよびⅡ」（４/14）

「日本の変成岩研究の進展と展望」（４/11）

「構造地質学の最近25年の成果と今後の展開：第1部」（１/８）

・Web of Scienceのコアコレクションのサブカテゴリーである「Emerging Sources Citation Index（ESCI）」（IFは付帯なし）への登録申請をおこなった．

・学術情報データベース（EBSCOhost）から地質学雑誌を収録したい旨連絡があった．費用負担や事務的な手間を確認したうえで収録する方向で検討中．

2）アイランドアーク編集委員会（田村，代斎藤）

（1）編集状況

Vol.25 Issue 6（2016年11月）：IGCP608*1，坂口特集*2から各２編，一般原稿１編：計５編

*1 Land-Ocean Linkages and Biotic Evolution during the Cretaceous: Contribution from Asia and Western Pacific

*2 The mechanics and evolution of megathrusts within accretionary complexes

（2）オンライン投稿の状況

過去半年（2016.5.1～2016.10.20）の投稿数47件．うち新規投稿38件．

（3）その他

・論文のHTML版の日本語要旨については，表題やキーワードは表示されず，要旨本文のみが表示されるように変更となった．

・著者のORCID ID入力を義務化：Wiley出版の学術ジャーナルにおいて，投稿時に投稿著者のORCID ID入力を義務化して運営する方針となり，それに伴い，Island Arcも義務化することとなった（11月以降予定）．

・誌面変更（New Journal Design：NJD）の最終承認を行い，あわせて英文編集のContent Style Sheetを更新した．

3）企画出版委員会（小宮）

・子ども向け地質学デジタル教材の制作についての検討

6．社会貢献部会（平田・杉田・廣木・辻森）

・秋の地質研修は定員６名の申し込みがあり，実施が確定した．

・「地質調査研修実施要領」案を検討

7．ジオパーク支援委員会（平田）

・下北，筑波山，箱根（範囲拡大再申請）の３箇所が日本ジオパークに新規認定

8．地質技術者教育委員会（山本）

・桜上水大会で夜間小集会を開催，フィールドマスター制度などについて意見を交換した．

9．125周年記念事業実行委員会（緒方，渡部）

・委員会開催報告　9/30，10/26

・地質学雑誌特集号，ジオルジュ特集号，ロゴ，会員カード等の進捗状況報告

10．県の石支援委員会（辻森，代斎藤）

・９～10月の広報活動の資料報告

・学会websiteに英語版（石渡元会長作成，35th IGCで配布）を掲載する

・今後の広報活動の方向性

以上

2016年11月19日

一般社団法人日本地質学会執行理事会

会　長（代表理事）渡部芳夫

署名人　執行理事　斎藤　眞

2016年度
第５回執行理事会議事録

日時：2016年11月19日（土）　13:00～17:30

場所：地質学会事務局

出席者：渡部会長　山本副会長　齋藤常務理事　安藤（４時半退出）　緒方（３時退出）　岡田　田村　小宮　辻森　内藤　中澤　平田　西　（事務局）橋辺　矢島（125実行委員長：14:00～14:40）

欠席者（委任状提出あり）：松田副会長　坂口　杉田（渡部）廣木　山田（委任なし）

＊定足数（12，委任状含む）に対し，出席者13名，委任状４名，合計17名の出席．

＊前回議事録の承認

審議事項

1．「地質調査研修実施要領」の策定（再検討）について（杉田・緒方）

“「地質調査研修」講師謝金に関する取決め”として再提案され，提案どおり承認された．

2．名誉会員推薦委員会，階層別委員候補者として次の方々の内諾を得た．（山本）

・官公庁：加藤碩一（産総研），小中高教員：会田信行（秀明大学校教師部），会社：足立勝治（アジア航測），大学：木村　学（東京海洋大学）

・職責委員（各支部長）７名（竹下　徹，柴正敏，有馬　眞，大藤　茂，三田村宗樹，石塚英男，仲谷英夫）

・理事会推薦委員１名：理事会にて決定

3．大学改革支援・学位授与機構よりの，大学及び高等専門学校の機関別認証評価委員会専門委員候補者の推薦依頼について（締切12/９）

推薦実績について確認し，内諾を得たうえで女性２名を含む３氏を推薦することとした．

4．Orthorhombicの訳語について（中澤）

直方晶系（斜方晶系）の使用を承認

5．愛媛大会の８件の巡検（案）の確定について（岡田）

巡検実行委員会案の詳細を確認の上承認．安全対策，旅行保険についても現状を確認．

6．県の石出版企画案について（辻森）

・各県A５版見開き2p.の出版社提案を確認．今後は支援委員会として出版を進めることを承認．

・地質学会websiteの「県の石」サイトに鉱物科学会の「国の石」をリンクする．

7．ジオルジュ125周年記念特集号について（矢島理事，渡部会長）

125周年記念事業実行委員会案のジオルジュ国際版（内容，経費等）について確認し，配布・販売先についても検討の上，承認した

8．編集投稿出版規則の改正

逐条確認し，郵送投稿の廃止については承認．細則４の引用文献の略記書式については，差し戻し再検討を要請．

9．IAR編集業務について（安藤）

学会事務局で行っている編集事務業務をWileyに委託することを検討し，事務局の業務実態およびWileyが提示した業務内容，経費を検討し，2017年１月より実施できるように，次回（12/３）の理事会に提案することとした．そのために，編集委員長，編集委事務局長，事務局で，至急Wiley担当者と交渉し詳細をつめることとする．

10．2016年度事業実績経過報告（渡部会長）

資料に基づき確認し，各担当者が追加事項を理事会に間に合うよう会長に提案する．

11．2017年度事業計画骨子（案）（渡部会長）

資料の追加内容について，各担当者が追加事項を理事会に間に合うよう会長に提案する．

12．創立125周年に向けてのアクションプラン（案）（渡部会長）

資料を確認し，１月News誌掲載に向けて，具体的な内容を執行理事がそれぞれ検討し，会長に提案する．

13．12月理事会議案の確定

議案

・総会の日程について：５月20日（土）ないし21日（日）12:15-13:45を予定する．連合会場の中でで100人くらいの部屋をあらかじめ予約．なお会場費は無料．

・2016年度事業実績経過報告

・2017年度事業計画骨子（案）
・地質学雑誌投稿編集出版規則の改正
・IARの編集体制の変更について
・“「地質調査研修」講師謝金に関する取決め”について
・創立125周年に向けてのアクションプラン（案）
・名誉会員推薦委員会委員の選出
おもな報告事項
・125周年委員会報告
・子供ゆめ基金申請（子ども向け地質学デジタル教材の制作）に関する報告
・県の石出版物の報告
・執行理事会報告

報告事項

1．全体的報告

1）子ども向け地質学デジタル教材の制作について，（株）デジラタの竹内氏および（株）オリーブグリーンの大野氏らと協議し，11/7に平成29年度の子供ゆめ基金に応募した．第一次審査の結果は12月中に出る予定．これに通れば第二次審査の際にはヒアリングがある．（小宮）

2）原子力学会会誌アトモス編集委員会より会長へ寄稿依頼があり了承した．（渡部会長）3.11以降の活動についてとりまとめる予定．

3）地球惑星連合第15回学協会長会議報告（渡部会長）

所属学協会の団体社員と個人会員から選出される個人社員が重複する場合があるので，団体社員を無くすことになった．その代わりの組織を作って連合の理事会に意見を挙げる道筋をつけることなった．

2．運営財政部会：総務委員会（緒方・西）

＜共催・後援依頼，他団体の募集等＞

1）「第54回アイソトープ・放射線研究発表会」（2017/07）の共催を承諾し，運営委員として小宮剛理事を推薦した．

2）地質汚染-医療地質-社会地質学会主催の「第26回環境地質学シンポジウム」（11/25-26）の共催を承諾した

＜会員＞

1．今月の入会者（3名）：正会員（学部割）〔3名〕：藤原弘士（書類修正の上承認する），柿畑優季，大山　望

2．今月の退会者　なし

3．今月の逝去者（名誉会員1名）倉沢一（11月13日）

4．2016年10月末日会員数

賛助：27，名誉：57，正会員：3714（正会員：3530，正（院割）会員：171，正（学部割）会員：13）合計 3798（昨年比 −76）

＜会計＞

・東京桜上水大会の収支については，概算で83万円ほどの黒字となる見込み．

3．広報部会：広報委員会（坂口・小宮・内藤）

1）フォトコンの募集について，各所へポスターの配布をし,周知した．

2）ジオルジュ2017年前期号の企画会議を11/11に開催

3）博多の陥没事故について産総研HPにリンクした．

4．学術研究部会（岡田・山田）

1）行事委員会（岡田）

・愛媛大会における情報展および市民講演会について，来年度の科研費に応募した．

5．編集出版部会（中澤・田村・小宮）

1）地質学雑誌編集委員会（山路編集委員長，中澤担当）

(1) 編集状況報告（11月17日現在）．

2016年投稿論文　総数86編［総説15（和文15），論説42（和文42），報告7（和文4，英文3），講座5（和文5），ノート3（和文2，英文1），口絵3（和文3），巡検案内書11］

査読中：41，受理済み：14編（うち特集号2）

・122巻11月号：論説4，報告1（計約60ページ，10/21校了，10/29発送予定）

・125周年記念特集号投稿状況（実際投稿数/予定論文数）

「深海掘削計画（IODP）と深部掘削船「ちきゅう」10年の成果IおよびII」（5/14）

「日本の変成岩研究の進展と展望」（5/12）

「構造地質学の最近25年の成果と今後の展開：第1部」（4/8）

「日本の火成岩研究の進展と展望」（1/7）

・編集投稿出版規則の改正を検討

2）アイランドアーク編集委員会（田村）

(1) 編集状況

Vol.25 Issue 6（2016年11月）：Article 3編，Pictorial 2編；計5編（11/4発行済み）

Vol.26 Issue 1（2017年1月）：IGCP特集号4編，一般原稿1編；計5編予定

(2) オンライン投稿の状況

過去半年（2016.5.15～2016.11.15）の投稿数42件．うち新規投稿31件．

(3) その他

・IAR編集業務について検討中

・アイランドアークの場合，学会事務局の仕事としては原稿の管理が主である．原稿の受け渡しと管理，編集長及び委員との間のやり取り，Willeyとの間の取次などである．特に学会としての意見を反映させるような職務の内容でもない．ついては，学会として人員を補充するか，この業務を他へ委託することの可能性について検討すべき．とりあえずWilleyの担当者（荒生氏）にこの業務について，同社で引き受けられるかどうかの可能性について確認したところ，「有」との返事をもらっている．

・現在Wileyから編集費100万円が学会に手当されている．

・Wileyから委託費用および業務内容が提案された．

・Wileyの会計は12月締めなので，依頼するなら早いほうがよい．12月執行理事会で検討を依頼し，直後に実施するのがよいであろう

3）企画出版委員会（小宮）

・子ども向け地質学デジタル教材の制作で子どもゆめ基金に応募を検討→全体報告へ

6．125周年記念事業実行委員会（緒方，渡部）

・記念ロゴの決定報告：選考過程・結果を確認し，ロゴ最終案の詳細を検討の上承認した．ロゴ関連記念グッズについては次回提案する．

・ジオルジュ特集号について→審議事項へ

・その他

7．県の石支援委員会（辻森）

・11月活動報告

・県の石出版企画書案（改定版）について→審議事項へ

8．その他（西）

・連合の西田賞（若手），フェローの推薦について，地質学会から積極的に推薦すべき．特に固体地球．地球生命．個人推薦なので，周知する必要がある．12月下旬締め切り．

・連合の人材育成分科会の地理・地学教科書の用語の統一を図る．本年はリストアップまでの見込み．

以上

2016年12月3日

一般社団法人日本地質学会執行理事会

会　長（代表理事）渡部芳夫

署名人　執行理事　斎藤　眞

CALENDAR

2017. 1 ～

地球科学分野に関する研究会，学会，国際会議，などの開催日，会合名，開催学会，開催場所をご案内致します．会員の皆様の情報をお待ちしています．
★印は学会主催，（共）共催，（後）後援，（協）協賛．

2017年

1月　January

（協）第14回岩の力学国内シンポジウム：JSRM2017 ～人類の未来を支えるフロンティア研究と岩の力学～
1月10日（火）～ 12日（木）
場所：神戸大学百年記念館
http://rock.jsms.jp/jsrm2017/

（後）地質標本館新春特別展 ふるさとの新たな主役「県の石」
1月17日（火）～ 2月26日（日）
場所：産総研地質標本館
https://www.gsj.jp/Muse/exhibition/archives/2017/2017_spring.html

○第194回地質汚染イブニング・セミナー
1月27日（金）18:30～20:30
場所：北とぴあ901会議室
講師：古野邦雄（元千葉県環境研究センター主席研究員），高嶋　洋（野田市道路管理課主査）
テーマ：関東地下水盆管理と水循環基本法
http://www.npo-geopol.or.jp/event.htm

2月　February

○第21回「震災対策技術展」横浜
2月2日（木）～ 3日（金）10:00～17:00
場所：パシフィコ横浜
参加費無料
https://www.shinsaiexpo.com/yokohama/

○第195回地質汚染イブニング・セミナー
2月24日（金）18:30 ～ 20:30
場所：北とぴあ902会議室
講師：張　銘（産総研　地圏環境リスク研究グループ長）
テーマ：環境微生物による揮発性有機化合物（VOCs）複合汚染の分解
http://www.npo-geopol.or.jp

3月　March

○日本学術会議公開シンポジウム
「学術振興の観点から国立大学の教育研究と国による支援のあり方を考える」
3月1日（水）13:30 ～17:00
場所：日本学術会議講堂（東京都港区六本木）
参加費無料・事前登録不要
http://www.scj.go.jp/ja/event/

○ブルーアース2017
3月2日（木）～ 3日（金）
http://www.jamstec.go.jp/maritec/j/blueearth/2017/invitation.html

○4th IGS（international Geoscience Symposium）Precambrian World 2” in Fukuoka
3月3日（金）～ 5日（日）
場所：九州大学西陣プラザ
http://www.kochi-u.ac.jp/marine-core/precambrian_world/PW2017/top.html

○第51回日本水環境学会年会
3月15日（水）～17日（金）
場所：熊本大学黒髪キャンパス
https://www.jswe.or.jp/guest/entry.php

○第24回GSJシンポジウム「ようこそジオ・ワールドへ」
3月18日（土）13:00～17:00
場所：TKP神田ビジネスセンター 5F（JR神田駅東口）
第一部 体験型講座
「地質学基本の“き”」高橋雅紀
第二部 講演会
「宮澤賢治とジオ・ロマン」加藤碩一
「地学オリンピックの10年－その歩みと功績－」瀧上豊・冨永紘平
「地学教育への期待」川辺文久
https://unit.aist.go.jp/igg/ja/event/sympo001.html

5月　May

○JpGU-AGU Joint Meeting 2017
5月20日（土）～25日（木）
会場：千葉県 幕張メッセ
投稿早期締切　2月 3日（金）12:00
投稿最終締切　2月16日（木）17:00
http://www.jpgu.org/meeting_2017/

6月　June

○地質学史懇話会
6月17日（土）13:00～17:00
場所：北とぴあ 8階804号室（JR京浜東北線王子駅下車3分）
平山　廉「カメの始まりから2億年の歴史を語る」（仮）
山田俊弘「17世紀地球論の発生と展開」（仮）

7月　July

（共）第54回アイソトープ・放射線研究発表会
7月5日（水）～ 7日（金）
場所：東京大学弥生講堂（東京都文京区弥生1-1-1）
発表論文の申込締切：2月28日（火）17:00
http://www.jrias.or.jp/

○ International Conference on Geology, Mining, Mineral and Groundwater Resources of the Sub-Saharan Africa: Opportunities and Challenges Ahead
7月11日（火）～13日（木）
場所：ザンビア共和国、リビングストン
http://mines.unza.zm/conference/

8月　August

（後）科学教育研究協議会第64回全国研究大会
8月7日（月）～ 9日（水）
場所：広島なぎさ中学高等学校（広島県佐伯区）
http://kakyokyo.main.jp/

○第10回白亜紀国際シンポジウム（10th ISC 2017）
8月21日（月）～24日（木）
場所：オーストリア・ウィーン UZA Ⅱ（Universitätszentrum Althanstrasse）
https://10cretsymp.univie.ac.at/home/

9月　September

★日本地質学会第124年学術大会（2017愛媛大会）
9月16日（土）～18日（月）
場所：愛媛大学理学部ほか（松山市文京）
講演申込受付：5月末頃～ 7月5日（水）

10月　October

（後）第4回Slope tectonics 2017
10月14日（土）～18日（水）
場所：京都大学宇治キャンパス黄檗プラザ
http://www.slope.dpri.kyoto-u.ac.jp/SlopeTectonics2017/st2017.html

（共）第15回国際放散虫研究集会（15th InterRad）
10月23日（月）～27日（金）（研究集会）
20日（金）～22日（日）（プレ巡検）
28日（土）～31日（火）（ポスト巡検）
場所：新潟大学など
http://www.radiolaria.org/interrad/

○IGCP608 Asia-Pacific Cretaceous Ecosystems第5回国際研究集会
10月26日（木）～27日（金）
場所：韓国済州島 済州国際コンベンションセンター
http://igcp608.sci.ibaraki.ac.jp/

広告募集

ニュース誌に広告を掲載しませんか？

ニュース誌の掲載広告を募集しています．学会直接取り扱いになりますので、カラー印刷・掲載サイズなどご相談に応じます．是非ご利用ください！

	価格（白黒）	版下作成	カラー印刷
表4	60,000	+10,000	+10,000
表2	50,000	+10,000	---
表3	40,000	+10,000	---
本文頁	35,000	+5,000	---

（単位：円）

【お得な割引価格も設定しています！！】

掲載位置・サイズにかかわらず，
4回掲載一括注文：10％割引
6回掲載一括注文：15％割引
※一年度内（4～3月）もしくは一巻内（1～12月号）で一括注文頂いた場合に限ります．

申込・問い合わせ：一般社団法人日本地質学会 事務局
電話　03-5823-1150　FAX03-5823-1156
e-mail: main@geosociety.jp

広報誌ジオルジュ　一括割引購入のご案内

日本地質学会では広報誌「ジオルジュ」を発行しています（年2回発行．定価250円）．

博物館・学校・研究機関などで，イベントでの配布物，友の会へのプレミアグッズ，ストアなどでの販売物として，ジオルジュを利用してみませんか．部数に応じて割引価格を設定しておりますので，是非ご検討下さい．

【割引価格例】
100部：20,000円（定価2割引）
300部：52,500円（定価3割引）
これ以外についてもご希望に応じてご相談承ります．

毎号各地のジオパークの特集記事の掲載も企画しています．ジオパークの広報の一環としてもご活用ください．

最新号（2016後期号）発行

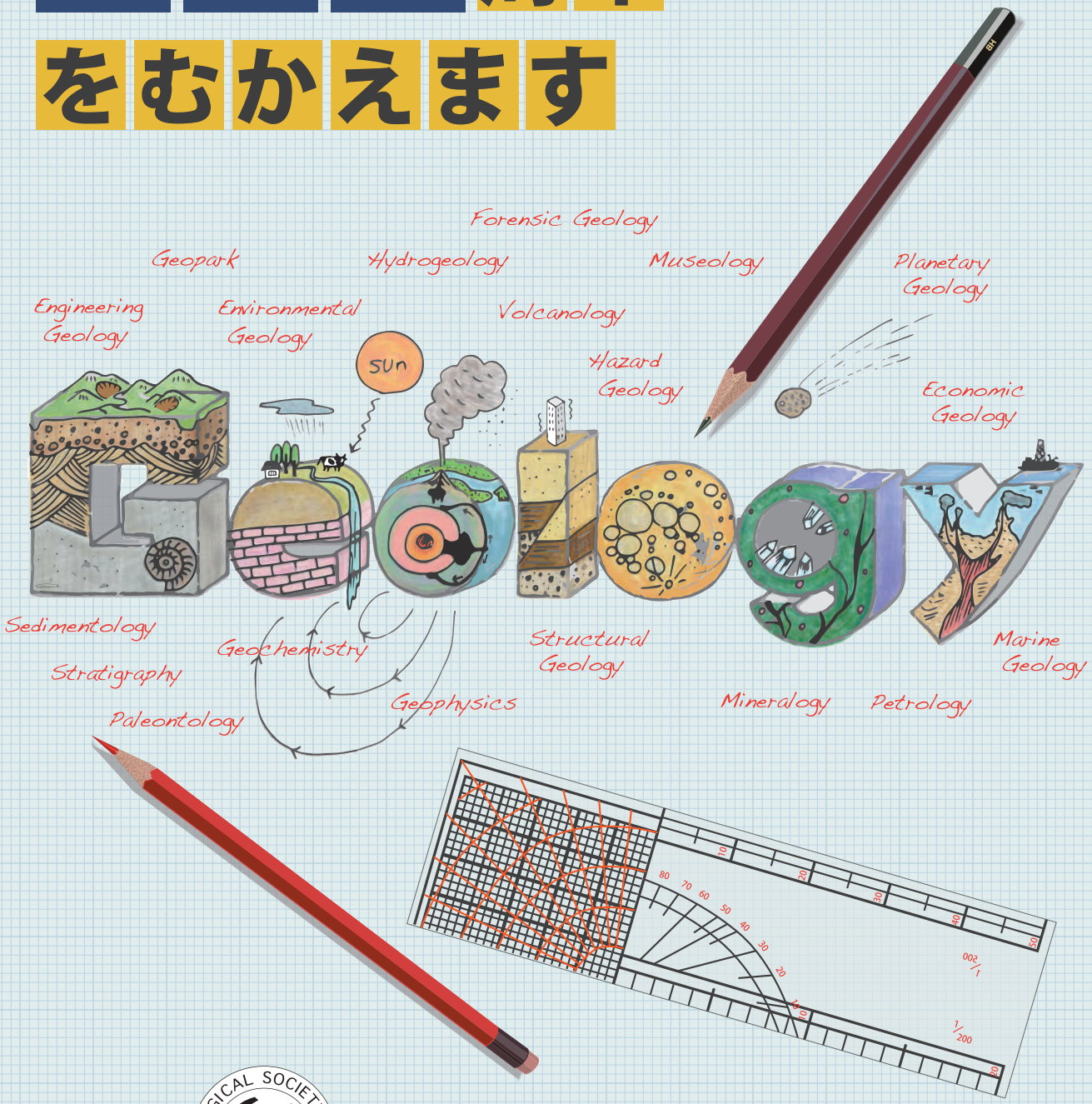
申込・問い合わせ：**一般社団法人　日本地質学会**
電話　03-5823-1150　FAX03-5823-1156　e-mail: main@geosociety.jp

2018年

日本地質学会は

125周年

をむかえます



一般社団法人 日本地質学会

e-mail : main@geosociety.jp　URL : http://www.geosociety.jp

©一般社団法人日本地質学会　〒101-0032　東京都千代田区岩本町2-8-15　井桁ビル6F　電話03-5823-1150
Fax 03-5823-1156　E-mail : main@geosociety.jp　ホームページ http://www.geosociety.jp